秋田県出土銭貨資料一覧(県北～県中版)

No.	遺跡名	所在地	出土時期	内容		文献
N1	毛馬内古館	鹿角市十和田毛馬内字古館	寛政のころ(1789～1800)	伊藤宗兵衛が天保7年(1836)に著した『鹿角縁起』古舘の項には、「寛政のころ(1789～1800)、毛布の里下小路と云所の市人何かしなるもの、麹室を造れるの節土中より瓶をほり出せしか、古銭数百千銭のありて朽もせすして青くさひたるのみなり」の記事が見られる。毛馬内の古館は、現在中世城館である当麻館跡(N21)として周知されており、ここから出土したものと推測される。	―	今村義孝監修『新秋田叢書』第3巻 1971
N2	新斗米館跡第1次	鹿角市花輪字新斗米	昭和54年	奥羽山脈西麓から樹枝状に伸びた台地先端部に立地する館跡である。沢を挟んだ北側の台地には小枝指館跡(N10・11)が位置する。昭和54年に第1次調査が実施されている。銭貨は、遺構内外より8点出土した。内訳は第1号竪穴2、大溝状遺構4、遺構外2である。銭名は以下の3種が示されているが、どの銭貨がどこから出土したのかについての記載はない。	洪武通寶、永楽通寶、天口元寶	鹿角市教委『鹿角市新斗米館跡第Ⅰ次発掘調査報告書』1980
N3	新斗米館跡第2次	鹿角市花輪字新斗米	昭和55年	昭和55年に第2次調査が行われ、232点の銭貨が出土した。このうち有銘銭は10点であり、判読できたのは右の6点である。遺構内では、8遺構より43点の銭貨が出土している。一方、遺構外では189点の銭貨が出土しており、「縄状の紐に通した185枚の無銘銭が一括で出土」している。これら無文銭については、報告書の中で分析を行っている。「無銘銭には内孔が方形のものと円形のものがあり、その割合は68:152である。方形のものは外径は14.2～21.5mm、内孔一辺6.3～11.6mm、厚さ0.5～1.4mmであり、円形のものの外径は10.3～17.4mm、内径7.1～12.9mm、厚さ0.4～1.2mmであり、円形のものが方形のものよりも外径が小さく、厚さも薄い傾向にある。」と記している。	8号竪穴:無文銭1／18A号竪穴:口元通口1、無文銭1／18B号竪穴: 無文銭3／19号竪穴:無文銭1／25号竪穴:無文銭1／26号竪穴:景徳元寶 1／32号竪穴:洪武通寶1、無文銭1／土室状遺構:洪武通寶1、無文銭28、判読不能3／遺構外:無文銭189	鹿角市教委『鹿角市新斗米館跡第Ⅱ次発掘調査報告書』1981
N4	湯瀬館遺跡	鹿角市八幡平字湯瀬古館	昭和54年	天正19年(1591)館破却との史料が残る中世館跡である。昭和54年に調査が行われ、掘立柱建物跡、礎石建物、空堀等が検出されている。銭貨は15点出土しており、遺構内出土の銭貨は全て「館コ」と称される郭面を二分する上面幅8.3m、深さ3.68m、基底幅2.41mの箱薬研状の空堀内(埋土上位)より8点得られている。また遺構外では7点出土している。判読不能あるいは無文銭9点のうち8点は「銭名の削りとりか銭名をつけずに鋳造したものの2者が考えられるが、前者の可能性が高い」と記されている。	空堀内:開元通寶1、元祐通寶1、判読不能・無文6／遺構外:開元通寶1、永楽通寶2、寛永通寶1、判読不能・無文3	秋田県教委「湯瀬館遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅰ』1981
N5	歌内遺跡	鹿角市八幡平字鳥居平	昭和54・55年	平安時代～中世の集落遺跡である。昭和54・55年に調査が実施され、遺構外より銭貨が3点出土した。	天聖元寶1、皇宋通寶1、寛永通寶1	秋田県教委「歌内遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅱ』
N6	長牛城跡	鹿角市八幡平字長牛(別称:たたら館)	昭和55年	中世城館長牛城跡の最東端に位置するたたら館は、昭和55年に発掘調査が実施された。舌状台地の基部には空堀が開削されており、遺構外より銭貨1点出土した。出土遺物は銭貨以外は古代の土師器であり、古代末の防御集落の可能性がある。	元豊通寶1	鹿角市教委『長牛城跡発掘調査報告書』1981
N7	妻の神Ⅱ遺跡	鹿角市花輪字妻の神	昭和55年	中世乳牛館(N8)の一郭を占める遺跡である。昭和55年に調査が行われ、平安時代の竪穴住居跡、中世の竪穴建物跡(床面に地床炉を有す)等が検出されている。銭貨はSI006とした中世の竪穴内より3点出土した。同竪穴では銭貨以外の遺物は出土しなかった。	皇宋通寶1、元祐通寶1、洪武通寶1	秋田県教委「妻の神Ⅱ遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書ⅩⅠ』1984
N8	乳牛平遺跡	鹿角市花輪字乳牛平	昭和56年	中世城館である乳牛館に比定される遺跡である。昭和56年に調査が行われ、土塁・空堀で区画された内部(郭面)で竪穴遺構、掘立柱建物跡、焼土遺構等が検出されている。銭貨は遺構外より5点出土した。	熈寧元寶2、大観通寶1、聖宋元寶1、判読不能1	秋田県教委「乳牛平遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅷ』1984
N9	高瀬館跡	鹿角市花輪字堪忍沢	昭和61年	前館、熊館、浦館の3館からなる多郭連続式の中世城館である。昭和61年に熊館第Ⅰ郭東側先端部分を調査し、掘立柱建物跡、方形竪穴遺構、土坑等を検出した。銭貨は3基の遺構より13点出土した。	SKI08:開元通寶1、熈寧元寶1／SK01:皇宋通寶1／SK02:開元通寶1、至道元寶1、景徳元寶1、皇宋通寶2、元豊通寶1、元符通寶1、宣和通寶1、大宋元寶1、景定元寶1	秋田県教委「高瀬館跡」『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘地区報告書Ⅱ』1987

No.	遺跡名	所在地	出土時期	内容		文献
N10	小枝指館跡第1次	鹿角市花輪字小枝指館	昭和30年	7あるいは8つの郭から構成される多郭連続式の中近世の城館である。昭和30年、東京大学東洋文化研究所による発掘調査が行われている。調査の結果、3カ所の館址の遺構内外より、銅銭24点、鉄銭1点が出土した。内訳は第2館址では3点、第3館址では、2号住居と遺構外より以下の銭貨が出土している。第4館址では、1号住居より計5点が出土している。同住居は県内では類例の極めて少ない内耳鉄鍋が検出されている。5号住居と遺構外でも無文銭が各1点出土している。出土銭貨について報告では、「第四館址の第1号住居址において多くの鉄製品や木製品とともに4点の銅銭がその床面に散在の状態で検出されたことで、このことは七館出土の銅銭が明らかに退蔵品ではなく、当時の実用品であったことを示している」と記している。	【第2館址】遺構外：祥符元寶1、嘉祐通寶1、無文銭1 【第3館址】2号住居：皇宋通寶1、聖宋元寶1、洪武通寶1、無文銭7／遺構外：鉄銭1、無文銭3 【第4館址】1号住居：皇宋通寶1、熙寧元寶3、元祐(元符)通寶1／5号住居：無文銭1／遺構外：無文銭1	東京大学東洋文化研究所「秋田県鹿角郡柴平村小枝指七館遺跡」『館址』1958
N11	小枝指館跡第2次	鹿角市花輪字小枝指館	平成3年	平成3年、鹿角市教委による発掘調査が実施され、遺構外より6点の銭貨が出土した。	熙寧元寶1、元符通寶2、寛永通寶3	鹿角市教委『小枝指館跡発掘調査報告書』1992
N12	地羅野館跡	鹿角市花輪字地羅野	平成4年	3つの郭から構成される中世館跡である。平成4年に第Ⅰ郭南半部の調査が実施され、竪穴遺構、土坑、空堀などが確認された。銭貨は2遺構（6号竪穴床面・19号土坑）より各1点出土した。銭貨の出土した6号竪穴は11世紀代の竪穴住居を切って構築されている。	6号竪穴　判読不能1　19号土坑　洪武通寶1	鹿角市教委『地羅野館跡発掘調査報告書』1993
N13	花輪館跡第1次	鹿角市花輪字中花輪	昭和58年	6以上の郭（本館、北館、南館、ゆるぎ館等）から構成される城館跡である。昭和58年に調査が行われた。北館では、竪穴遺構、土坑、遺構外より34点出土している。2号竪穴床面直上では13点、3号竪穴床面直上では2点、12号竪穴柱穴内より1点、17号竪穴床面より1点、2号土坑1点が確認されている。また遺構外では10点の銭貨が出土した。南館では遺構外より無文銭1点が出土した。	2号竪穴：天聖元寶1、元祐通寶1、淳熙元寶1、洪武通寶3、判読不能7／3号竪穴：□□元寶1、判読不能1／12号竪穴：判読不能1／17号竪穴：寛永通寶1／2号土坑：判読不能1／北館遺構外：天聖通寶？1、元祐通寶1、洪武通寶1、寛永通寶6、□□通寶1／南館遺構外：無文銭1	鹿角市教委『花輪館跡試掘・下沢田遺跡発掘調査報告書』1984
N14	花輪館跡第2次	鹿角市花輪字中花輪	昭和62年	昭和62年に第2次調査が行われた。北館南縁の小郭では遺構内外より20点の銭貨が出土した。3号竪穴のうちの1本の柱穴では15点の銭貨がまとまって出土している。このうち1点の永楽通寶には、紐が結ばれていた。8号竪穴では1点、掘立柱建物を構成すると考えられる柱穴内では2点が、遺構外でも2点出土している。	3号竪穴：元祐通寶1、大観通寶1、嘉泰通寶1、洪武通寶8、永楽通寶3、無文銭1／8号竪穴：天聖元寶1／柱穴内：紹聖元寶1、判読不能1／遺構外：永楽通寶1、寛永通寶1	鹿角市教委『花輪館跡試掘調査報告書（2）』1988
N15	花輪古館跡	鹿角市花輪字古館	平成5年	安保姓花輪氏を代々館主とする中世城館と伝えられる遺跡である。平成5年に調査が実施され、明確に館期に位置づけられる遺構の確認はできなかったが、遺構外より銭貨が1点出土している。	景徳元寶1	鹿角市教委『花輪古館発掘調査報告書』1994
N16	小平遺跡	鹿角市花輪字八幡平	昭和52年	主に平安時代・中世の集落遺跡である。昭和52年に調査が行われ、両時代の竪穴住居跡、竪穴遺構、掘立柱建物跡等が検出されている。銭貨は中世期と見られる張り出し部を伴う竪穴遺構（第1号住居跡）床面より1点（径約1.9cmの無文銭）、遺構外より破片1点が出土した。	1号住居：無文銭1／遺構外：□□通寶1	鹿角市教委『小平遺跡』1979
N17	黒土館跡第1次	鹿角市花輪字下タ町	平成7年	いわゆる鹿角四十二館の一とされる中世館跡である。平成7年に館跡西側の帯郭部分の調査が行われ、堆積土中より17～18世紀代の陶磁器等と共に銭貨4点が出土した。	元祐通寶1、鉄銭2、寛永通寶1	鹿角市教委『黒土館跡発掘調査報告書』1996
N18	黒土館跡第2次	鹿角市花輪字下タ町	平成8年	平成8年、Ⅶ郭北西側斜面部を調査し、帯郭上より5点の銭貨が出土した。なお寛永通寶のうちの1点は秋田川尻銭の可能性がある。	淳化元寶1、寛永通寶2、判読不能1	鹿角市教委『黒土館跡発掘調査報告書（2）』1997
N19	黒土館跡第3次	鹿角市花輪字下タ町	平成9年	平成9年、Ⅶ郭南西側斜面部を調査し、空堀内などから2点の銭貨が出土した。	空堀内：熙寧元寶1／遺構外：判読不能1	鹿角市教委『黒土館跡発掘調査報告書（3）』1998
N20	黒土館跡第4次	鹿角市花輪字下タ町	平成10年	平成10年、Ⅶ郭南側斜面部を調査し、3点の銭貨が出土した。1点は、1帯郭第2期面（遺構外）出土である。	判読不能3	鹿角市教委『黒土館跡発掘調査報告書（4）』1999

No.	遺跡名	所在地	出土時期	内容		文献
N21	当麻館跡	鹿角市十和田毛馬内字古館	昭和63年	天文5年～慶長13年(1536～1608)にかけて存続した毛馬内氏の居館とされる遺跡であり、毛馬内古館とも称される。昭和63年に調査が行われ、中近世の掘立柱建物跡4棟、竪穴遺構71基、土坑29基などが検出された。銭貨は遺構内47点、遺構外7点の計54点を確認している。竪穴遺構では71基のうち12基より銭貨が出土している。9号竪穴では6点がまとまって出土した。その他の遺構では、第3号掘立柱建物跡1点、掘立柱建物を構成すると考えられる柱穴内より1点、25号土坑2点、2号土坑1点、15号土坑1点、10号土坑2点、30号土坑でも無文銭1点がそれぞれ確認されている。また遺構外から7点が出土した。	9号竪穴:熙寧元寶2、元豊通寶1、□□元寶1、判読不能2／12号竪穴:天聖元寶1／16号竪穴:天聖元寶1、皇宋通寶1、判読不能1／19号竪穴:無文銭1／20号竪穴:洪武通寶1／28号竪穴:洪武通寶1／35号竪穴:皇宋通寶1、嘉祐通寶1／50号竪穴:　元□□寶1／51号竪穴:無文銭1／62号竪穴:?元重寶1、祥符元寶1、皇宋通寶2、嘉祐元寶1、熙寧元寶3、元豊通寶1、淳熙元寶1、洪武通寶2、□□通寶1、□□□寶2、判読不能2、無文銭1／64号竪穴:元□通寶1／73号竪穴:無文銭2／3号建物:無文銭1／柱穴内:洪武通寶1／25号土坑:洪武通寶1、無文銭1／2号土坑:判読不能1／15号土坑:判読不能1／10号土坑:無文銭2／30号土坑:無文銭1／遺構外:元祐通寶1、淳祐元寶1、洪武通寶2、判読不能2、無文銭(小型の鳩目銭)1	鹿角市教委『当麻館跡発掘調査報告書』1989
N22	妻の神Ⅲ遺跡	鹿角市花輪字妻の神	昭和56年	乳牛館(N8)と称される中世城館の一郭を占めると推定される遺跡である。昭和56年に調査が実施され、掘立柱建物跡、張り出しを持つ方形竪穴遺構、焼土遺構、土坑、土坑墓、柵列などが検出されている。銭貨は竪穴遺構、土坑墓、遺構外より26点出土している。人骨等の遺存から土坑墓と判断された遺構は3基あり、その3基の土坑から13点の銭貨が出土している。SKS53では、「2枚の小さい円形の柾目の板の間に･･･(銭貨)6枚が挟みこまれ、両手の手のひらで持たせたかのような状態で出土している」。SKS54では、「骨盤のあたりから1枚出土して」いるが、銭種は判読不能である。SKS57では、坑底北東部で6点の銭貨が出土している。なおSKS53･54は、頭部を北にし、体の右側を下にした側臥屈葬人骨が検出されている。また遺構外では、5点の銭貨が出土している。	SI05:咸平元寶1、治平元寶2、永楽通寶1、判読不能2／SI15床面:皇宋通寶1／SI38:治平元寶1／SKS53:皇宋通寶1、嘉祐通寶1、聖宋元寶1、判読不能3／SKS54:判読不能1／SKS57:景徳元寶1、治平元寶1、元豊通寶1、洪武通寶2、判読不能1／遺構外:紹聖元寶1、聖宋元寶1、大観通寶1、元豊通寶か1、判読不能1	県教委「妻の神Ⅲ遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅸ』1984
N23	石鳥谷館跡	鹿角市八幡平	平成9年	9つ以上の郭からなる大規模な中世城館の一角を調査。掘立柱建物跡やかまど状遺構を検出。銭貨は17点出土と報告されるが、その出土位置の記述はない。	永楽通寶1、寛永通寶15、五十銭貨1	県教委『石鳥谷館跡』1998
N24	柴内館跡	鹿角市花輪字乳牛平	平成12･13年	古代から中世の集落跡、近世の土坑墓14基が検出された。銭貨は7点あり、中世の竪穴状遺構内から2点、その他は遺構外出土である。	SKI1266:洪武通寶1、SKI1197:永楽通寶1／遺構外:聖宋元寶1、元豊通寶1、洪武通寶1、寛永通寶2	県教委『柴内館跡』2003
N25	三ヶ田館跡	鹿角市八幡平字浦田	平成17年	鹿角四十二館の一つとされる館跡である。土塁･空堀･切岸が検出され、中世以降の掘立柱建物跡や柱列、土坑等も確認。他には縄文時代前期の捨場も検出。銭貨は近世の土坑内から陶器片と共に1点出土している。銭貨の出土位置は示されているが、図･写真はなし。	SK1:寛永通寶1	県教委『三ヶ田館跡』2007
N26	一本杉遺跡	鹿角市花輪字明堂長根	平成19年	古代～中世の集落遺跡である。平成19年の調査により、耕作土中より鉄銭1点が出土した。	鉄銭1	鹿角市教委『一本杉遺跡』2007
N27	十和田湖中海	小坂郡小坂町休屋	昭和10年頃	『秋田銭貨史』によると、昭和10年頃「十和田湖、十和田神社の占場の湖水から夥しい金、銀、銅、鉄銭、銀貨、銅貨が潜水夫によって引き揚げられる」とある。占場の湖水は、十和田湖に突き出る二本の半島に挟まれた中湖を指す。占場は、十和田湖第一の霊地とされ、神社参拝者がここから浄財を湖中に投ずる風習があり、水揚げされた銭貨は信仰に伴う賽銭と推定される。	―	佐藤清一郎『秋田銭貨史』1972
N28	片山館コ遺跡	大館市片山	昭和47年	古代･中世･近世初期の集落･館跡である。昭和47年の調査において、第12号とした竪穴遺構内よりまとまって3点の銭貨が出土した。同竪穴では、薬壺と思われる陶器、炭化穀物が木器に納められた形で検出されている。銭貨は大館郷土博物館に展示されている。	熙寧元寶1、紹聖元寶1、大観通寶1	大館市史編さん委員会『大館市片山館コ発掘調査報告書第1次』1973
N29	餌釣館跡	大館市餌釣	平成6年	平成6年に大館市教委により調査が行われ、中世の掘立柱建物跡や近世の信仰塚等が検出されている。銭貨は2時期の遺構内より11点出土した。中世では、掘立柱建物跡を構成する柱穴確認面において1点出土している。なお近世期では、塚や溝跡から10枚の銭貨が出土した。いずれも寛永通寶である。内訳は、塚SX01表土中1点、同塚構築に伴う掘削溝埋土上位より2点、塚SX02表土中6点、近現代の道路側溝と推定される溝埋土中1枚である。塚では、銭貨以外の遺物の共伴は認められなかった。	柱穴確認面:紹□元寶1／近世遺構内:寛永通寶10	大館市教委『餌釣館跡発掘調査報告書』1996

No.	遺跡名	所在地	出土時期	内容		文献
N30	前田館跡	大館市比内前田	昭和53年	舌状台地の先端部に位置する館跡である。昭和53年に調査が行われ、台地基部に幅7～10m、深さ1.5～2mの堀が掘削され、先端の平坦面では竪穴住居跡、掘立柱建物跡、板塀遺構等が検出された。銭貨は堀埋土中より1点出土した。同堀内では多量の板状木片、緑釉段皿、珠洲系擂鉢、管状鉄製品等も発見されている。報告では、同館を「前田地域の中心地をなす前田氏の居館跡であった」と結論づけている。遺物は大館郷土博物館に保管されている。	堀埋土中：元祐通寶1	大館市史編さん委員会「前田館」『大館市史』第1巻　1979
N31	谷地中館遺跡第1次	大館市比内町谷地中字館	昭和46年	独立残丘上に立地する中世館跡である。昭和46年から3次にわたる調査が行われ、竪穴遺構、土坑、柱穴列等が検出されている。銭貨は第1次調査で遺構外より3点出土した。	元豊通寶1、政和通寶1、判読不能1	大館市史編さん委員会『谷地中「館」・中野円墳状遺構発掘調査報告書』1973
N32	谷地中館遺跡第3次	大館市比内町谷地中字館	昭和51年	銭貨は昭和51年の第3次調査で3点出土しているが、出土位置の記述はない。	天禧通寶1、治平元寶1、聖宋元寶1	比内町教委『谷地中「館」遺跡発掘調査報告書』1987
N33	大日堂前遺跡	大館市比内町独鈷字大日堂前	昭和55年	中世浅利氏と関連の深い館跡と考えられる遺跡である。昭和55年に調査が行われ、遺構外より銭貨15点が出土している。調査区は大日堂という神社境内であり、出土した寛永通寶は、この神社に由来するものとも想定される。	治平通寶1、寛永通寶14	比内町教委『大日堂前遺跡発掘調査報告書』1982
N34	真館跡	大館市比内町新館字真館	昭和47年	古代～中世の集落跡・館跡である。昭和47年に調査が行われ、次年に刊行された報告書の記載によると「発掘区内北半竪穴床面」より銭貨1点が出土したとある。拓影図、写真等なく、詳細は不明である。	皇宋通寶1	比内町教委『真館緊急調査報告書』1973
N35	谷地中遺跡	大館市商人留	平成16年	縄文時代と古代の複合遺跡。銭貨は遺構外より1点出土している。	寛永通寶1	県教委『田ノ沢山遺跡　谷地中遺跡』2005
N36	根下戸道下遺跡第2次	大館市根下戸新町	平成18年	縄文時代の狩猟場、弥生時代の焼土遺構も検出されている。銭貨は遺構外より寛永通寶2点出土。図・写真・計測値掲載。	寛永通寶2	県教委『根下戸道下遺跡（第2次）』2007
N37	狼穴Ⅲ遺跡	大館市釈迦内	平成18年	平安時代の集落遺跡である。遺構外より近世以降の陶磁器類と共に銭貨が1点出土した。	寛永通寶1	県教委『狼穴Ⅲ遺跡』2008
N38	十二所代官所跡	大館市十二所字元館・片町・中町	平成18年	江戸時代の代官所跡（再来館）とされる。公民館建設に伴い確認調査が実施された。その結果、再来館に関連すると考えられる柱穴等が検出された。銭貨は1点出土している。写真あり。	天禧通寶1	大館市教委『大館市内遺跡詳細分布調査報告書』2008
N39	冷水岱	北秋田市米内沢字冷水岱（旧森吉町）	―	詳細は不明ではあるが、冷水岱にて銭貨が多数出土したようである。	―	（当時）秋田県埋蔵文化財センター秋田北分室杉渕馨氏の教授による
N40	小様	北秋田市阿仁小様（旧阿仁町）	―	詳細は不明ではあるが、筆者が実見した限りでは、次の40種542枚を確認した（2001年）。	開元通寶38、唐國通寶2、宋通元寶1、太平通寶4、淳化元寶5、至道元寶6、咸平元寶13、景德元寶11、祥符元寶14、祥符通寶6、天禧通寶11、天聖元寶30、明道元寶1、景祐元寶7、皇宋通寶63、至和元寶8、至和通寶2、嘉祐元寶3、嘉祐通寶7、治平元寶8、熙寧元寶43、元豊通寶48、元祐通寶60、紹聖元寶12、元符通寶4、聖宋元寶14、大観通寶2、政和通寶12、宣和通寶2、淳熙元寶1、慶元通寶1、嘉泰通寶1、紹定通寶1、嘉熙通寶1、咸淳元寶1、正隆元寶1、洪武通寶21、永楽通寶69、宣德通寶1、朝鮮通寶5、判読不能2	筆者一部銭貨実見（2001年）
N41	向様田A遺跡	北秋田市森吉	平成12年	縄文時代晩期の墓域、13～14世紀代の遺物散布地。銭貨は遺構外より熙寧元寶1点出土。報告書に記載はない（高橋実見）。	熙寧元寶1	県教委『向様田A遺跡』遺物編2004
N42	日廻岱A遺跡	北秋田市森吉	平成12年	縄文時代晩期の土坑墓と近世の民家跡（掘立柱建物跡）が検出された。銭貨は建物を構成する柱穴内1点、遺構外1点出土である。銭貨が出土した柱穴は、母屋部北側柱列の中央（P3）部にあたる。遺構外出土銭貨は、図と観察表が付されている。	SB113-P3：寛永通寶1／遺構外：寛永通寶1	県教委『桐内沢遺跡・日廻岱A遺跡』2002
N43	二重鳥G遺跡	北秋田市森吉	平成13年	縄文時代中期～晩期の集落跡である。近世以降の掘立柱建物跡も2棟検出。銭貨は遺構外より寛永通寶が25点出土し、報告書には全点表裏の拓本が図示されている。	寛永通寶25	森吉町教委『埋蔵文化財発掘調査報告書　二重鳥C・G遺跡』2003

No.	遺跡名	所在地	出土時期	内容		文献
N44	諏訪岱Ⅱ遺跡	北秋田市米内沢	平成13年	古代から中世にかけての集落跡である。銭貨が出土したのは、1軒の竪穴建物内（報告では竪穴住居跡）である。	SI115床面：天聖元寶2，治平元寶1、政和通寶1、洪武通寶1	県教委『諏訪岱Ⅱ遺跡　長野岱Ⅲ遺跡』2003
N45	日廻岱B遺跡	北秋田市森吉	平成14年	縄文時代後期の環状集落と近世の小規模な集落跡である。銭貨は、近世出土遺物として寛永通寶1点が図示されている。	寛永通寶1	県教委『日廻岱B遺跡』2005
N46	森吉家ノ前A遺跡	北秋田市森吉	平成14・15年	縄文時代の集落・墓地と中世の集落・墓地（火葬墓）が検出された。銭貨は火葬墓と見られる土坑・柱穴5基から出土した。詳細な説明や図なし。写真のみ掲載。	SK3043：開元通寶ほか3、皇宋通寶ほか6、大観通寶1、永楽通寶1、SKP284：永楽通寶1（火葬骨出土）、SKP296：開元通寶1、祥符通寶1、洪武通寶1、判読不能1（火葬骨出土）、 SK303：永楽通寶2、判読不能1（火葬骨出土）	県教委『森吉家ノ前A遺跡』2006
N47	深渡A遺跡	北秋田市森吉	平成15・16年	縄文時代の集落・食料貯蔵域・墓地と近世の屋敷跡（掘立柱建物跡=直屋形式）、井戸跡等が検出されている。銭貨は近世の建物柱穴内出土であるが、出土位置や点数の記述、図・写真の掲載はない。屋敷跡の時期は、柱間距離などから近世前期と推測。	SB35：寛永通寶	県教委『深渡A遺跡』2006
N48	地蔵岱遺跡	北秋田市森吉	平成16・17年	古代後半から中世にかけての大規模集落跡。銭貨は掘立柱建物跡も竪穴状遺構、井戸跡等から22点出土した。なお図版263の2は、天元通寶（日本の島銭）としているが、天聖元寶の誤りと見られる。また図版263の7は、熙寧元寶である。	開元通寶1、至道元寶1、天聖元寶2、熙寧元寶1、聖宋元寶1、大観通寶1、洪武通寶1、永楽通寶1、寛永通寶5、判読不能6	県教委『地蔵岱遺跡』2008（高橋学が写真での判読、2008.4.30）
N49	大森下浜	能代市大森	元禄7年（1694）	宇野親貞が寛保元年（1741）に著した『代邑見聞録』によると、「元禄七年（1694）甲戌地震の後・・・大森下浜菅交りの沙地へ折節往来ありて古銭など拾ひたまひける」との記述が見られる。大森下浜は、米代川河口左岸の日本海沿岸の大森、下浜集落にあたることから、おそらく海岸に打ち上げられた銭貨を拾ったことを記録したものと思われる。この記事が秋田県内での出土銭の初例となる。	―	今村義孝監修『新秋田叢書』第4巻　1971所収
N50	浄明寺首塚	能代市檜山	寛政11年（1799）	1　能代市檜山に所在する浄明寺では、寛政11年（1799）4月4日に裏山の麓にある塚より銭貨等が出土したことを寺社奉行に報告している。これを大越五水という人が弘化2年（1845）に密かに書写しており、後年真崎勇助（1841～1917）が収集した文書の中に『山本郡檜山浄明寺掘出品之書上』として現存する。同書には、銀皿に乗せられた頭蓋骨、水晶の数珠、絞金具、銀針に通された9点の銭貨が個々に図示されている。これらの遺物は、真崎勇助が著した『酔月堂随筆』（巻之二）の「山ノ崩ヨリ出ル髑髏并器物」によると、欅と思われる丸桶（内朱塗り、外面黒塗り）に入っていたようである。更に銭貨は2本の銀針金（尋常の火箸程の太さ）にそれぞれ6点と3点に分けて通されていたとも記している。 2　出土銭の記事は、秋田藩士の淀川盛品が文化12年（1815）に著した『秋田風土記』にも次のように記されている。「庭前より髑髏出、銀の台破れたり。水晶の念珠、輪銀に銀の文字替の銭九文あり。奉りし処又葬るへしとて返し賜るといへり」とあり、出土品は再び塚に埋納されたようである。	開元通寶1、?元重寶1、熙寧重寶1、元豊通寶1、元符通寶1、崇寧通寶1、宣和通寶1、慶元通寶1、咸淳元寶1	1　真崎勇助（収集）『山本郡檜山浄明寺掘出品之書上』（大館市立中央図書館蔵）。 2　今村義孝監修『新秋田叢書』第15巻　1972所収
N51	上平張遺跡	能代市檜山字上平張	昭和53年	昭和53年6月23日、能代市檜山の瀬戸沢と称される沢先端に位置する新田堤の水位の下がった水辺で青錆で覆われた多量の銭貨が発見された。銭は縄状のもので結わえられていたそうであるが、容器は確認できなかった。出土点数は発見者が直後に記載したと思われるメモには4,960点（筆者実見）とあり、出土時に一部はバラで見つかっていることから、埋納時は5,000点以上であったと推定できる。現在の保管点数は4,764点である。このうち『能代市史』考古編には、武田孝義氏が2,220点の分類を行っている。その銭種は次のとおりである。その他「中国銭のほか朝鮮の朝鮮通寶、安南銭が含まれ、和銭（皇朝銭）はない。」と記している。銭貨は現在発見者宅に保管されている。	開元通寶100、?元重寶5、唐國通寶4、宋通元寶14、太平通寶30、淳化元寶46、至道元寶61、咸平元寶70、景徳元寶72、祥符元寶128、天禧通寶61、天聖元寶69、明道元寶9、景祐元寶17、皇宋通寶180、至和元寶8、至和通寶2、嘉祐元寶10、嘉祐通寶14、治平元寶18、熙寧元寶70、元豊通寶244、元祐通寶123、紹聖元寶67、元符通寶14、聖宋元寶64、大観通寶4、政和通寶39、宣和通寶3、淳熙元寶7、慶元通寶2、嘉泰通寶2、嘉定通寶2、大宋元寶1、紹定通寶1、皇宋元寶1、景定元寶1、正隆元寶2、大定通寶1、洪武通寶15、永楽通寶625、宣徳通寶14	武田孝義「上平張遺跡」『能代市史』考古編　1995
N52	金山館跡	能代市向能代字平影野	昭和59・60年	米代川河口域右岸の独立丘上に立地する館跡である。昭和59・60年に調査が行われ、弥生・古代・中世・近世のある時期に使用された複合遺跡であることが判明した。銭貨は遺構外より21点出土した。銭名の判読できたものは次の2種のみである。	景徳元寶1、寛永通寶1、判読不能19	能代市教委『金山館発掘調査概報』1985／ 能代市教委『金山館発掘調査報告書』1986

No.	遺跡名	所在地	出土時期	内容		文献
N53	福田遺跡	能代市浅内字福田上野	昭和62年	9世紀後半代の集落遺跡である。昭和62年に調査が行われ、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、これら施設を区画する溝、柱穴列等が検出されている。銭貨は遺構外より2点出土した。	洪武通寶1、鉄銭1	県教委「福田遺跡」『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』
N54	新大林遺跡	能代市二ツ井町飛根字新大林	昭和38年	昭和38年11月、米代川左岸の河川敷に程近い平坦地、大林の通称「やしきの畑」から「曲げっぱのような桶にびっしり入っていた」銭貨が発見された。出土総数約1万点との記載はあるが、正確な点数は明らかではない。銭名は次の21種が『二ツ井町史』に記されている。?元重寶かは、町史には唐朝の乾元大寶と記載されている。	開元通寶、?元重寶か、宋通元寶、太平通寶、淳化元寶、景徳元寶、天聖元寶、皇宋通寶、嘉祐通寶、治平元寶、熙寧元寶、紹聖元寶、聖宋元寶、大観通寶、政和通寶、宣和通寶、淳熙元寶、慶元通寶、紹定通寶、景定元寶、洪武通寶	二ツ井町町史編さん委員会「大林の古銭」『二ツ井町史』1977
N55	竜毛沢館跡	能代市二ツ井町切石字竜毛沢	昭和63年	3つの郭からなる中世城館である。昭和63年に調査が行われ、主に14世紀代の掘立柱建物跡、竪穴建物跡、これら施設を区画する柵列（板塀）、空堀等が検出されている。銭貨はSB02とした本館跡最大規模の建物を構成する柱穴内埋土上位で4点出土した。本建物は書院造系統の建物とされる。	開元通寶1、元□通寶1、□元通寶1、判読不能1	県教委『竜毛沢館発掘調査報告書』1990
N56	岩館海岸？	八峰町八森字岩館	寛政7年（1795）	『秋田銭貨史』によると、寛政7年（1795）「山本郡岩館村の者海岸で金、銀銭（外国銭）を拾う」とある。人見蕉雨の記録から引用したようであるが、原典不詳で筆者未確認である。	―	佐藤清一郎『秋田銭貨史』1972
N57	物見	八峰町八森字物見	大正13年	『八森郷土誌資料』第27号によると、大正13年、旧八森町物見において鉄道工事中に「渤海の古銭が多量に出土した」との記載が見られる。詳細は不明である。なお物見の近くの林ノ沢では昭和59年に多量の銭貨が出土している（N58）。	―	佐々木正雄「中国の古銭」『八森郷土誌資料』第27号　1987
N58	林ノ沢	八峰町八森字林ノ沢	昭和59年	昭和59年7月2日、日本海汀線まで200m程の旧八森町林ノ沢台地にて土止工事中に地下40Cm程のところで曲物に入れられていた多量の銭貨が発見された。曲物は、現在その底板のみ残存しており、底径は24cm、厚さ0.5cmである。銭貨と共に保管されていた中に藁紐（径2.5～3mm程で左撚）があり、銭緡の状態で埋納されていたと思われる。『秋田魁新報』7月7日付に「中国の古銭6,700枚ザクザク、八森で工事中に発見」との記事も掲載されている。出土銭は、昭和62年に佐々木正雄氏が総数6,720点を55種に分類している。銭名は右のとおりである。元祐通寶のうち1点は孔を円形に加工しており、また淳熙元寶の1点は孔が八方穿を示す加工銭である。遺物は旧八森町教委に保管されており、銭貨の一部は額装され町内の小中学校・公民館に展示されている。	五銖（後漢）6、開元通寶532、?元重寶15、周通元寶2、唐國通寶3、宋通元寶17、太平通寶58、淳化元寶51、至道元寶115、咸平元寶106、景徳元寶156、祥符元寶183、祥符通寶63、天禧通寶152、天聖元寶297、明道元寶18、景祐元寶78、景祐元寶か8、皇宋通寶861、至和元寶83、至和通寶29、嘉祐元寶82、嘉祐通寶127、治平元寶103、治平通寶14、熙寧元寶723、元豊通寶763、元祐通寶607、紹聖元寶279、元符通寶91、聖宋元寶260、大観通寶84、政和通寶248、宣和通寶16、建炎通寶1、淳熙元寶36、紹熙元寶6、慶元通寶11、嘉泰通寶5、開禧通寶4、嘉定通寶26、大宋元寶3、紹定通寶11、端平元寶1、嘉熙通寶4、淳祐元寶7、皇宋元寶14、景定元寶9、咸淳元寶10、正隆元寶3、天聖通寶？9、至正元寶？1、咸元通寶？2、判読不能327	佐々木正雄「中国古銭の出土」『八森町誌』1988
N59	内林遺跡	八峰町峰浜石川字内林	昭和15年頃	昭和15年頃、塚に納められていた甕の内部より少量の銭貨が発見された。旧峰浜村教委の松田純一氏の教示によると、塚を覆っている土にはたくさんの石が入っていたことから積石塚かもしれない。甕は二斗甕でいくつも並んで出ており、塚を掘った人は染物でもやっていたのではないかと考えたそうである。銭貨が入っていたのはその内の1つであり、少ししか出ていないようである。現在銭貨及びその容器である甕の所在は明らかではない。なお「秋田県遺跡カード」には、「戦前迄は経塚が存在していたが、農耕の為整地された。・・・付近に方形で土壇状の地形をした場所を確認している。」との記載もある。本遺跡は、昭和53年に圃場整備事業に伴う範囲確認調査が実施されている。この結果では「小規模な空濠」や溝状遺構、ピットが検出され、かわらけの坏・皿、須恵器系陶器（甕・壺）、白磁片などが出土している。時期的には13世紀代と推定される。	―	県教委「内林遺跡」『秋田県遺跡分布調査報告書』1979
N60	蝦夷館跡	八峰町峰浜目名潟字竹長根	昭和39年	西に日本海を望む舌状台地先端部に立地する館跡である。台地基部には長さ70m、幅5～6m、深さ2～3mの空堀が3条認められる。昭和39年に発掘調査が行われ、建物や柵列を構成すると考えられる柱穴等が検出され、土師器、須恵器、青磁、白磁、黄瀬戸、染付等と共に判読不能の銭貨が1点出土している。	判読不能1	峰浜村教委「蝦夷館遺跡」『峰浜村の文化財』1975

No.	遺跡名	所在地	出土時期	内容		文献
N61	館の上館遺跡	三種町鵜川字館の上（旧八竜町）	平成4年	4つの郭面からなる中世城館である。平成4年に第Ⅰ郭帯郭の一部を調査し、遺構外より銭貨3点が発見された。	皇宋通寶1、宣和通寶1、文久永寶1	県教委「館の上館遺跡」『一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
N62	扇田谷地遺跡	三種町鵜川字扇田谷地	平成7年	古代～中世にかけての集落遺跡である。平成7年に発掘調査が実施され、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、製鉄炉等が検出されている。銭貨は中世期と推定される竪穴状遺構（SKI44・45）より、22点錆着して出土した。いずれも火熱を受け脆弱である。銭種の判明しているのは次の11点である。同遺構は共伴した須恵器系陶器から14世紀代と推定される。	宋通元寶1、天聖元寶1、皇宋通寶1、至和元寶1、元豊通寶2、元祐通寶2、元祐通寶か1、紹聖元寶1、政和通寶1	県教委『扇田谷地遺跡』1999
N63	盤若台遺跡	三種町鹿渡	平成10～12年	古代の製鉄炉群、中世の墓域を検出。銭貨は1点出土している。図示されるが、出土状況等の記述はない。	元祐通寶1	県教委『盤若台遺跡』2001
N64	中石浜①	男鹿市五里合中石	宝暦2年（1752）	①享和元年（1801）に稿了された人見蕉雨の随筆集『黒甜瑣語（こくてんさご）』（四編巻之二）「寺内村の銭」の項にはいくつかの出土銭の記録がまとめられている。その中に「宝暦壬申の冬、雄鹿中石村の海岸へ銅銭数万を吹上し事あり。記号みな宋の年号にして、さばかりの異銭にもあらず」とある。宝暦壬申は、宝暦2年（1752）を指す。人見は出土した銭貨を実際に見ていたのかは不明であるが、同年に著した紀行文『夏ノ木草』には、「中石むらへ近づき、かの宝暦壬申の冬宋の古銭を網したる浜を尋ね」と中石浜を訪れたことを記している。	―	①人見蕉雨『人見蕉雨集』第二冊 1968
N65	中石浜②	男鹿市五里合中石	同上	②鈴木重孝が嘉永年間（1848～54）に著した『絹篩』（巻之三）中石村の項にも、宝暦2年冬の中石浜出土銭を「当浜へ相揚候古銭」と記している。鈴木は銭種の一部も書き残している。	淳化元寶、至道元寶、咸平元寶、景德元寶、天禧通寶、天聖元寶、明道元寶、景祐元寶、皇宋通寶、嘉祐元寶（あるいは通寶）、治平元寶（あるいは通寶）、熙寧元寶、元豊通寶、元祐通寶、紹聖元寶（あるいは通寶）、元符通寶の16種類の銭名が記されている。その他に「天福と云銭、これは晋の高祖の年号に候へ」とあることから、天福元寶（後普938年初鋳）も含まれていたようである。	②深沢多市編『秋田叢書』第2巻 1929
N66	中石浜③	男鹿市五里合中石	同上	③菅江真澄の『月の出羽路（仙北郡八）』にも「宝暦壬申の冬、雄鹿中石ノ浜に銅銭数万吹上し事あり」との記載が見られる。これは『黒甜瑣語』からの引用であることを明記している。	―	③内田武志・宮本常一編『菅江真澄全集』第7巻　1978
N67	中石浜④	男鹿市五里合中石	同上	④石井忠行が明治5年3月に著した『伊頭園茶話』(三の巻)にも同様の記事が見られる。ここでは、寛政元年（1789）と昭和54年にも多量の出土銭が発見されており、N70・76に示す。	―	④今村義孝監修『新秋田叢書』第7巻　1971
N68	豹が崎	男鹿市脇本富永字大倉	江戸時代	狩野徳蔵が著した『雄鹿名勝誌』によると、江戸時代（18世紀後半か）大倉豹が崎において「同村の信五郎といふ者も同処より古銭一萬枚を掘得たりと云う」と記されている。豹が崎では明治8年にも多量の銭貨が出土しており、N72で後述する。	―	狩野徳蔵『雄鹿名勝誌』五版 1914
N69	舟越	男鹿市船越か	安永7年（1778）	『黒甜瑣語』奇銭の項には「安永戊戌の春、舟越村へ異船漂着せり。朝鮮国の漁船の類にや、長さ十間ばかり幅八尺余、舟子一人もなく舟中に釜一つ、嚢に此常平銭百文余あり、背に半月露痕の点あざやかにして禁文。戸八。管全。当水。・三。訓十。などの字あり。銭座の標記なるべし。」と記されている。安永戊戌は、安永7年（1778）である。常平銭は朝鮮1678年初鋳の常平通寶である。本例は漂着船より得られたもののようであり、厳密には出土銭とは言い難い。	常平通寶	人見蕉雨『人見蕉雨集』第二冊 1968
N70	中石浜	男鹿市五里合中石	寛政元年（1789）	『伊頭園茶話』には、中石浜で再び大量の銭貨が打ち上げられたことを記している。寛政元年（1789）「同村浜に銭数万砂中へ吹上る。多くは宋朝己来の物也」とある。	―	今村義孝監修『新秋田叢書』第7巻　1971

No.	遺跡名	所在地	出土時期	内容		文献
N71	雄鹿の浦	男鹿市	享和年間 (1801～03)	1　菅江真澄が文化元年(1804)に著した日記『恩荷奴金風』の図絵に「享和のころ(1801～1803)雄鹿の嶼なにかしの浦に寄来る舟のうちにことくにの泉ありて、公に奉りし、のちはた磯辺にて童の拾ひたるといふを、ところどころに見し、みな常平通寶也」として、数点の常平通寶の模写図・拓影図が載　せられている。背には戸二、・五、訓宿等の文字が認められる。同図の次頁には、大型の絵銭(厭勝銭)拓影図も見られる。これも常平銭と一緒に採集されたものか。 2　常平通寶については、真澄が文化7年(1810)に著した日記『牡鹿の寒かぜ』の図絵にも「それのとし、雄鹿の浦に破れたり小舟のたたより来けり、うちに常平通寶いといと多くつみたり。此泉、朝鮮　通用の孔方也。その國の舟にや。」との説明を加えた銭貨の拓影図を載せている。両記事が同じ内容について言及しているのか否かは明らかではないが、模写・拓影図を見る限りでは別々の銭貨を掲載しているようである。	常平通寶	内田武志・宮本常一編『菅江真澄全集』第4巻　1973
N72	豹が崎	男鹿市脇本富永字大倉	明治8年	『雄鹿名勝誌』によると、明治8年3月19日大倉豹が崎において「富永村農佐藤八右衛門の堀たる古銭なり、開元通寶より永楽通寶まで二十一種取交ぜ八千八百枚」と記されてある。これらの銭貨については、後年石川理紀之助が整理を行い、明治40年に拓影本『豹が崎』(乾、坤)にまとめている。これによると発掘されたのは明治8年2月12日で、「大倉の西裏なる沢田の山崎豹が崎」で出土したようである。銭貨は杉の曲物に入れられていたとされる。『豹が崎』には、次の37種553点の拓影が貼付されている。元豊通寶のうち3点は千刈田(N106)例同様、孔をの加工した銭である八方穿が認められる。残りの銭貨は鋳つぶして山の神の尊像を造ったそうである。	開元通寶27、開元通寶(紀)2、?元重寶1、宋通元寶4、太平通寶4、淳化元寶6、至道元寶8、咸平元寶4、景徳元寶9、祥符元寶12、祥符通寶7、天禧通寶13、天聖元寶27、明道元寶7、景祐元寶15、皇宋通寶45、至和元寶6、至和通寶2、嘉祐元寶5、嘉祐通寶16、治平元寶12、熙寧元寶35、元豊通寶101、元祐通寶41、紹聖元寶28、元符通寶12、聖宋元寶21、大観通寶3、政和通寶24、宣和元寶1、淳熙元寶3、嘉泰通寶1、開禧通寶1、嘉定通寶4、正隆元寶1、大定通寶1、洪武通寶6、永楽通寶38	狩野徳蔵『雄鹿名勝誌』五版1914／石川理紀之助『豹が崎』(乾、坤)1907
N73	寒風山山麓	男鹿市寒風山	明治25年	『秋田銭貨史』によると、明治25年「寒風山山麓より永楽通寶出土す」とある。	永楽通寶	佐藤清一郎『秋田銭貨史』1972
N74	一向遺跡	男鹿市船越字一向	江戸時代	『絹篩』船越村の項には、一向において江戸時代より井戸跡、瀬戸類が土中より出土することが記されている。この時期の瀬戸類は現存しないようであるが、明治時代には、「曲物の井戸数個と黄瀬戸、志野をはじめとする陶器と壺入りの古銭2,000枚を掘り出」されている。このうち『船越誌』には、銭貨16点の拓影図が載せられており、右記の銭名が判読できる。なお、同地は八郎潟干拓事業に伴う新水道工事の際(昭和38年)にも多くの井戸枠や陶磁器類が出土しており、昭和40年には銭貨も採集されている(N79)。	開元通寶1、景徳元寶1、祥符通寶1、天聖元寶2、熙寧元寶1、元豊通寶2、元祐通寶1、紹聖元寶1、元符通寶1、聖宋元寶1、正隆元寶1、洪武通寶1、永楽通寶1、宣徳通寶1	磯村朝次郎「一向遺跡」『船越誌－その自然と歴史－』1978
N75	館山	男鹿市船川港双六字館山	昭和初年	昭和初年、双六字館山で建築工事中壺入りの古銭を掘り出したといわれる。ここには中世城館である双六館が位置している。	－	磯村朝次郎・小早淳「男鹿半島出土の古銭」『男鹿半島研究』第11号　1981
N76	北浜野	男鹿市五里合中石字北浜野	昭和54年	昭和54年、日本海汀線まで約300mの砂丘上(標高18m)に位置する北浜野において、砂を採取中に「一塊の古銭があらわれ」た。「古銭のほか何等の伴出物はなく、裸のまま埋められていた」ようであるが、銭貨の穿には「埋蔵当時と思われる藁が付着しており」緡の状態で埋納されていたと考えられる。磯村朝次郎氏らが「男鹿半島出土の古銭」の中で出土銭貨の分類と分析を行っている。銭名は以下の44種1,768点である。なお同報告には、銭貨の書体、背文字、鋳溜り、私鋳銭の有無等について分析が行われ、所見が加えられている。	開元通寶87、?元重寶1、唐國通寶1、宋通元寶6、太平通寶9、淳化元寶8、至道元寶23、咸平元寶16、景徳元寶27、祥符元寶28、祥符通寶25、天禧通寶32、天聖元寶53、明道元寶2、景祐元寶20、皇宋通寶151、至和元寶10、至和通寶5、嘉祐元寶27、嘉祐通寶24、治平元寶30、治平通寶7、熙寧元寶131、元豊通寶138、元祐通寶101、紹聖元寶46、元符通寶12、聖宋元寶48、大観通寶5、政和通寶47、宣和通寶3、淳熙元寶5、紹熙元寶1、慶元通寶5、嘉泰通寶1、嘉定通寶5、紹定通寶3、淳祐元寶1、正隆元寶4、大定通寶2、至大通寶1、大中通寶1、洪武通寶112、永楽通寶123、島銭1、無文銭370、判読不能10	磯村朝次郎・小早淳「男鹿半島出土の古銭」『男鹿半島研究』第11号　1981

No.	遺跡名	所在地	出土時期	内容		文献
N77	打越	男鹿市船川港双六字打越	昭和30年頃	昭和30年頃、双六字打越の畑地から耕作中に「ミゴ縄を通した古銭を発掘。むしろにいっぱい広げるだけあり、寛永銭は含んでいなかった」ようである。銭種は次の15種認められるという。	開元通寶、淳化元寶、祥符元寶(通寶)、皇宋通寶、治平元寶(通寶)、元豊通寶、紹聖元寶(通寶)、聖宋元寶、大観通寶、政和通寶、淳熙元寶、正隆元寶、大中通寶、洪武通寶、朝鮮通寶	磯村朝次郎・小早淳「男鹿半島出土の古銭」『男鹿半島研究』第11号 1981
N78	鹿の沢	男鹿市船川港比詰字鹿の沢	昭和56年以前	出土の時期は明らかではないが、船川港比詰字鹿の沢で「造園用の採石作業中、石の下から古銭の出土があり、人夫の1人がリックいっぱいつめてひそかに持ち去ったという」。出土銭には寛永銭が含まれており、939点が現存するという。	―	磯村朝次郎・小早淳「男鹿半島出土の古銭」『男鹿半島研究』第11号 1981
N79	一向遺跡	男鹿市船越字一向	昭和40年	江戸時代より井戸跡、陶磁器類等が出土し、中世～近世初頭頃まで存続していた集落跡と周知される遺跡である。昭和38年には八郎潟干拓事業に伴う新水道工事により16基の井戸跡等が検出され、同年3月29日付け『朝日新聞(秋田版)』には、「四百年前の集落跡みつかる」との見出しで記事が掲載されている。その後、昭和40年に磯村朝次郎氏が同地において現存する井戸跡8基を確認し、井戸内部及びその周辺から木器、陶器等と共に10点程の銭貨を採集されている。銭名の記載はない。	―	磯村朝次郎「船越一向遺跡調査概報－現存井戸跡を中心として－」『男鹿市文化財調査報告』No.1 1965
N80	小谷地遺跡	男鹿市脇本富永字小谷地	昭和36年以前	標高12m程の沖積面に立地し、古墳時代(5世紀代)と平安時代の埋没家屋を検出したことで周知される。発掘調査は昭和39年から4次にわたり実施されているが、銭貨は本調査以前に得られた資料である。	祥符元寶1	磯村朝次郎「脇本飯森家屋埋没遺址調査概報」『秋田考古学』第18号 1961
N81	南平沢	男鹿市船川港南平沢	昭和40年代	「男鹿半島出土の古銭」によると、「昭和40年代県道改修工事中南平沢大宮」より銭貨が出土したようであるが、詳細は不明である。	―	磯村朝次郎・小早淳「男鹿半島出土の古銭」『男鹿半島研究』第11号 1981
N82	真山遺跡	男鹿市北浦真山字水喰沢	平成8・9年	平成8・9年調査、第Ⅱ区では墳墓と思われる盛土遺構(報告では伝墳墓群)を41基確認しており、現状保存できない22基を調査している。銭貨が出土したのは、25号遺構内の炭集積ヶ所(No6)か ら2点、同土壙(SK08)上部から骨片と共に4点(うち1点は政和通寶)、盛土内より寛永通寶が1点それぞれ出土した。墳墓の時期については、放射性炭素年代測定によれば、13世紀末から15世紀末と17世紀前半の数値が示されている。また出土した陶器の年代も「15～16世紀ころと推定」している。第Ⅰ区では近代の居宅跡が2棟検出され、出土位置の報告はないが、天保通寶1点、寛永通寶8点(うち3点は波銭)の拓影図が載せられている。	第Ⅱ区25号遺構内No6:判読不能2、SK08:政和通寶1・判読不能3、盛土内:寛永通寶1／第Ⅰ区:天保通寶1、寛永通寶8	男鹿市教委『真山遺跡発掘調査報告書』1998
N83	福川	男鹿市福川(旧若美町)	享和元年(1801)	『黒甜瑣語』によると、「今とし辛酉(＝1801年)八月四日にも雄鹿福川村の農民、水かかりの堤をほし時古銭十貫文を得たるに、宝暦の頃中石村にて得たりし銭のごとく、常にしも周流の銭の内には稀にも見る所なれば愛づる事も少し」とある。雄鹿福川村は、旧若美町福川と思われる。	―	人見蕉雨『人見蕉雨集』第二冊 1968
N84	鵜ノ木経塚？	男鹿市鵜木か(旧若美町)	明治年間か	『秋田銭貨史』によると、「琴浜村鵜ノ木経塚から度々古銭出土す」とある。明治年間の出土か。琴浜村鵜ノ木とは若美町鵜木を指すものと思われるが、現在同地区周辺では塚・経塚は周知されていない。	―	佐藤清一郎『秋田銭貨史』1972
N85	松木沢	男鹿市松木沢字松木(旧若美町)	大正8・9年頃	大正8・9年頃、松木沢字松木において「裏庭に池をつくるため掘りくぼめたところ壺に入った古銭が出土した」。銭貨には寛永銭が「混入していたかもしれない」とのことである。	―	磯村朝次郎・小早淳「男鹿半島出土の古銭」『男鹿半島研究』第11号 1981
N86	脇本石館遺跡	男鹿市脇本脇本字向山	平成9年	縄文時代と平安時代の複合遺跡である。銭貨は1点、写真が載せられているが、出土状況の記述はない。	寛永通寶1	男鹿市教委『脇本石館遺跡詳細分布調査報告』1998
N87	祓川Ⅰ遺跡	男鹿市船川港本山門前	平成元年	赤神神社に関連する遺跡である。建物の礎石と思われる石列が検出された。銭貨は20点図示されているが、出土位置の記述はない。なお写真図版には「祓川Ⅰ遺跡出土無文銭」として、大量の銭貨が掲載されている。	開元通寶1、元豊通寶2、洪武通寶2、永楽通寶2、寛永通寶4、無文銭9(うち輪銭1)	男鹿市教委『男鹿市内遺跡発掘調査報告書(祓川Ⅰ遺跡・祓川Ⅲ遺跡)』2003
N88	祓川Ⅲ遺跡第1～4次	男鹿市船川港本山門前	平成12・13年	赤神神社五社堂周辺の遺跡である。第1次で銭貨1点、第2次5点、第4次12点である。いずれも出土位置の記述はない。	第1次:不明1、第2次:寛永通寶5、第4次:洪武通寶1、寛永通寶10、判読不能1	男鹿市教委『男鹿市内遺跡発掘調査報告書(祓川Ⅰ遺跡・祓川Ⅲ遺跡)』2003
N89	脇本城跡	男鹿市脇本脇本	平成7年	海に面した丘陵部に立地する中世後期の城館跡。平成7年には内館地区を調査。整地層や柱穴などを確認。遺物は15～16世紀の中国産青磁・白磁、染付や国産陶器類がある。銭貨は1点出土しているが、その位置や出土状況の報告なし。図示。	永楽通寶1	男鹿市教委『脇本城跡Ⅰ-第一次・第二次他調査報告-』2002

No.	遺跡名	所在地	出土時期	内容		文献
N90	脇本城跡	男鹿市脇本脇本	平成14～16年	道路改修に伴い城域の南西側隅部を調査（平成15・16年）。土塁・掘立柱建物跡等が検出された。銭貨は遺構内外より45点出土し、その他に塊でも見つかっているとの報告あり。図は8点示されているが、出土状況の説明なし。なお平成14年に行われた確認調査で洪武通寶や北宋銭が出土とあるが（文献1）、これが正報告（文献2）で紹介しているものを含むのか否かは確認が必要。	景徳元寶、祥符通寶、天禧通寶、皇宋通寶、紹聖元寶、洪武通寶、寛永通寶、無文銭	1男鹿市教委『市内遺跡詳細分布・確認調査報告書』2005 2男鹿市教委『脇本城跡』2005
N91	脇本城跡第8次	男鹿市脇本脇本	平成14年	第8次は、兜ヶ崎地区の調査である。銭貨は近世以降と見られる溝跡から1点出土している。図示。	SD03：寛永通寶1	男鹿市教委『脇本城跡Ⅱ－第8次～第10次調査報告－』2003
N92	脇本城跡第11次	男鹿市脇本脇本	平成15年	第11次は、城跡の中心地区である内館が対象である。銭貨は1点出土しているが、出土状況の記述はない。	元祐通寶1	男鹿市教委『脇本城跡Ⅲ－第11次・第12次調査報告－』2004
N93	脇本城跡第12次	男鹿市脇本脇本	平成15年	第12次は、城域南東裾部の宗教的な地区が対象である。銭貨は近世墓と見られる2基の土坑内からそれぞれ2点出土した。銭貨は板材の上に載せられており、SK02では共伴する遺物に漆器片がある。	SK01：寛永通寶2、SK02：寛永通寶2	男鹿市教委『脇本城跡Ⅲ－第11次・第12次調査報告－』2004
N94	脇本城跡第13次	男鹿市脇本脇本	平成16年	第13次は、内館地区北西部が対象である。銭貨は1点出土し図示されているが、詳細な報告はない。	判読不能1	男鹿市教委『脇本城跡Ⅳ　第13次・第14次他調査報告』2006
N95	脇本城跡第14次	男鹿市脇本脇本	平成17年	第14次は、内館地区北側中央部が対象である。銭貨は2点出土し、1点は図示されている。出土状況等の報告はない。	洪武通寶1、不明1	男鹿市教委『脇本城跡Ⅳ　第13次・第14次他調査報告』2006
N96	脇本遺跡（仲町・館下地区）	男鹿市脇本脇本字脇本	平成8・9年	脇本城と密接な関係にある遺跡。銭貨は仲町地区から3点出土との報告があり、1点が図示されている。また館下地区からも1点出土している。図なし。	仲町地区：寛永通寶1、不明2／館下地区：寛永通寶1	男鹿市教委『脇本城跡Ⅳ　第13次・第14次他調査報告』2006
N97	脇本遺跡（天神町地区）	男鹿市脇本脇本字横町道上	平成18年	道路工事に伴う調査。15～16世紀代の掘立柱建物跡や溝跡・土坑等が検出された。銭貨は1点が溝跡内出土、他17点は遺構外出土であった。図と観察表あり。	SD144：元豊通寶1、遺構外：開元通寶1、至道元寶1、咸平元寶1、景徳元寶1、祥符通寶1、天禧通寶1、皇宋通寶1、治平通寶1、元豊通寶1、紹聖元寶2、元符通寶1、政和通寶1、嘉泰通寶1、洪武通寶2、永楽通寶1	県教委『脇本遺跡』2008
N98	砂沢城跡付近	南秋田郡五城目町羽黒前か	江戸時代か	『五城目町史』によると、「砂沢城跡の近くから洪武通寶明四貫文が出土」との記載がある。江戸時代の出土と思われる。また同町史には、「前平山に近い稲荷前・・・から秋の字を刻んだ古銭が出土している」とも記されている。前平山は、砂沢城跡が位置するところであるが、詳細は不明である。	洪武通寶	五城目町『五城目町史』1975
N99	浅見内	南秋田郡五城目町内川字浅見内	昭和48年	『五城目町史』によると、昭和48年に「内川浅見内の某家の屋敷内から古銭が大量に出土した」ようである。浅見内には中世城館とされる浅見内館跡や五輪塔、板碑が存在する。	―	五城目町『五城目町史』1975
N100	多多羅	南秋田郡五城目町久保字多多羅	昭和40年	『新編・秋田の地名』によると、昭和40年に「銅治座跡を発掘したところ、鉄滓・銅古銭が多量にでた」とあるが、詳細は不明である。	―	三浦鉄郎『新編・秋田の地名』1987
N101	北遺跡	五城目町野田	平成11年	13～14世紀代の井戸跡、便所跡、土坑等が検出。銭貨は6点図示されているが、高橋が実見した限りではその他に判読不能の銭が数点確認できた。1点は土坑内、他は遺構外である。大観通寶3点と判読不能の1点は固桔した状態で出土した。	SK51：紹聖元寶1／遺構外：元豊通寶1、元祐通寶1、大観通寶3、判読不能	県教委『北遺跡』2001
N102	中谷地遺跡	五城目町大川谷地中字谷地	平成11年	板塀に囲まれた建物跡を検出。官衙関連遺跡か。他に近世の溝跡や陶磁器類が出土。銭貨は近世の溝跡から1点出土している。	SD19：寛永通寶1	県教委『中谷地遺跡』2001
N103	廣根（ひろね）	南秋田郡八郎潟町一日市字昼寝下	明治42年	明治42年、一日市の「ひろねという処の畑中」より銭貨が約7,000点掘り出された。出土したのは4月28日に約5,000点、5月3・4日に約2,000点の2度にわたるようであり、その地点は同一ではないものの、ほぼ隣接する場所で発見されたようである。このことは発見者の畠山喜代治という人が、石川理紀之助に鑑定を依頼した文書に添付されていた略図により明らかである。これによると出土地に隣接して神社（社地）があり、その西側に二階堤が描かれている。現在この両者は存在しないが、堤の位置から推定すると、神社は大正3年に一日市神社に合祀された相染神社のようであり、出土地は現在の一日市字昼寝下にあたるようである。銭貨の分類をおこなった石川は、大正4年に『ひろねのいづみ』としてまとめている。同書には点数の記載はないものの、次の44種の銭名が記されている。	開元通寶、?元重寶、唐國通寶、宋通元寶、太平通寶、淳化元寶、至道元寶、咸平元寶、景徳元寶、祥符元寶、祥符通寶、天禧通寶、天聖元寶、明道元寶、景祐元寶、皇宋通寶、至和元寶、至和通寶、嘉祐元寶、嘉祐通寶、治平元寶、熙寧元寶、元豊通寶、元祐通寶、紹聖元寶、元符通寶、聖宋元寶、大観通寶、政和通寶、宣和通寶、淳熙元寶、紹熙元寶、慶元通寶、嘉泰通寶、開禧通寶、嘉定通寶、紹定通寶、淳祐元寶、皇宋元寶、景定元寶、咸淳元寶、正隆元寶、洪武通寶、永楽通寶	石川理紀之助『ひろねのいづみ』1915

No.	遺跡名	所在地	出土時期	内容		文献
N104	夜叉袋	南秋田郡八郎潟町一日市字夜叉袋	昭和34年	昭和34年春、八郎潟町夜叉袋地区で耕地整理中、地表下約1.5mの粘土層より多量の銭貨が出土した。銭貨は無文銭、宋銭類が千点程で「玉石でもって囲まれ埋れていた」そうである。発見当時、出土銭を分析した秋田古泉会では、無文銭、宋銭とも地元で鋳造された私鋳銭と想定している。また『秋田銭貨史』には、「明治初期のニセー文銭多量に出土」と記されている。	―	秋田銭貨研究会『秋田銭貨ニュース』第5号　1976、佐藤清一郎『秋田銭貨史』1972
N105	鳥羽崎沼	南秋田郡八郎潟町	昭和31年以前	金井典美『湿原祭祀』に「信仰遺物の発見された湿原・池沼」の項目があり、このなかに、南秋田郡面潟村の鳥羽崎沼が紹介されている。遺物には古鏡・古銭と記される。面潟村は昭和31年の合併により八郎潟町となる。	―	金井典美『湿原祭祀』法政大学出版局1975
N106	千刈田	潟上市昭和豊川龍毛字千刈田	天保4・5年（1833・34）	天保4・5年（1833・34）頃、南秋田郡豊川村龍毛の川上という人が「五合入位の小瓶」に入った銭貨を龍毛字千刈田より掘り出した。これら銭貨は、明治に入ってから石川理紀之助により鑑定が行われ、明治41年『古泉　川上の巻』としてまとめている。同書には以下に記す35種216点の銭貨の拓影が貼付されている。なお開元通寶のうちの1点は石川が八方穿とした加工銭（中央の方孔の各辺に切り込みが認められるもの）である。	開元通寶（唐）11、開元通寶（南唐）1、?元重寶1、宋通元寶1、淳化元寶3、至道元寶6、咸平元寶2、景徳元寶5、祥符元寶5、祥符通寶4、天禧通寶2、天聖元寶6、景祐元寶3、皇宋通寶23、至和元寶2、至和通寶1、嘉祐元寶4、嘉祐通寶6、治平元寶6、熙寧元寶13、元豊通寶28、元祐通寶11、紹聖元寶8、元符通寶6、聖宋元寶8、大観通寶3、政和通寶8、淳熙元寶1、嘉定通寶1、紹定通寶1、開慶通寶1、咸淳元寶1、正隆元寶1、洪武通寶20、永楽通寶12、朝鮮通寶1	石川理紀之助『古泉　川上の巻』1908
N107	藤田	潟上市昭和大久保字天神下か	明治34年以前	石川理紀之助がまとめた『適産調』大久保村の項（明治34年編）には、「古銭　藤田の清水の出づるその街道の西の畑より出たる由　天神社の辺にもあり」との記録がある。藤田は旧昭和町大久保字天神下あたりか。	―	栗田茂治『南秋田郡史』1951より引用
N108	上虻川	潟上市昭和豊川字上虻川	昭和53年	昭和53年5月3日、旧昭和町豊川字上虻川の大井市郎氏が自宅の裏山で桐の苗木を植付中、土中約30cmのところで青錆に覆われた銭貨約3600点を発見した。連絡を受けた秋田銭貨研究会佐々木委員が現地調査した所、銭貨の「容器なし、大方散見した結果、開元より宣徳通寶までの渡来銭で昨年発見された豊岩銭と非常に似ている」と記述が残っている。豊岩銭はN127でふれる。	―	秋田銭貨研究会「昭和町で大量の渡来銭発掘さる」『秋田銭貨ニュース』第23号 1978
N109	大崎	潟上市天王大崎	明治33年以前	明治33年頃の編纂と推定される『天王旧蹟考』には、大崎村「上谷地の内大久保境に少し湾たる処り、・・・もと此処の潟の中に寺ありしといふ、大浪の時には古銭のよることあり」との記事が載せられている。潟は八郎潟を指す。	―	天王町役場『天王町誌資料』1968
N110	毘沙門遺跡	潟上市昭和豊川龍毛字上斉藤田	平成11年	近世の掘立柱建物跡、土坑等が検出された。土坑のうち1基は、トイレであった可能性が高い。銭貨は、掘立柱建物を構成する柱穴掘形から1点出土した。出土位置は南北棟建物の南西隅柱（p5）内である。	SB10P5：永楽通寶1	県教委『元木山根Ⅱ遺跡　毘沙門遺跡　六ツ鹿沢遺跡』2000
N111	西野遺跡	潟上市昭和豊川山田字家ノ上	平成12年	縄文時代・古代の集落跡。銭貨については記載なし。高橋が実見した限りでは、遺構外から寛永通寶2点出土。調査区に隣接して墓地があり、これに伴うものか。	寛永通寶2	県教委『西野遺跡』2003
N112	今戸遺跡	南秋田郡井川町今戸字寺の内	昭和49年	昭和49年、今戸字寺の内浅野氏宅地内で防火水槽工事中に「地下2・3mの粗い青砂の層から」多量の銭貨が出土した。出土量は「ポリバケツで三分の一くらい」である。その後、大多数は散逸してしまったが、225点の銭名の判読が行われている。遺物の一部は現在、井川町歴史民俗資料館に保存展示されている。	開元通寶22、?元重寶2、宋通元寶1、太平通寶2、至道元寶4、咸平元寶3、景徳元寶3、祥符元寶4、祥符通寶3、天禧通寶2、天聖元寶10、景祐元寶3、皇宋通寶32、至和元寶3、至和通寶1、嘉祐元寶4、嘉祐通寶9、治平元寶1、治平通寶1、熙寧元寶17、元豊通寶28、元祐通寶31、紹聖元寶9、元符通寶2、聖宋元寶6、大観通寶2、政和通寶7、宣和通寶1、淳熙元寶1、紹熙元寶1、淳祐元寶2、淳祐元寶(折二)1、景定元寶1、咸淳元寶2、判読不能4	井川町「今戸出土の中国古銭」『井川町史』1986

No.	遺跡名	所在地	出土時期	内容		文献
N113	洲崎遺跡	南秋田郡井川町浜井川字洲崎･苗代堰	平成10年	平成10年、ほ場整備事業に係る発掘調査が実施され、主に中世（13～16世紀）の集落跡であることが確認された。本集落は、大きく堀（SD49）で方形様に区画し、その内部には道路・溝（柵･塀･水路か）等が縦横に配される。この最小区画内に居住施設（掘立柱建物）が位置すると見ることができる。銭貨は、井戸跡・土坑（墓）・堀・竪穴状遺構・柱穴等の遺構内及び遺構外より90点程出土した。なお出土遺物の中には、墨絵も存在し「人魚供養札」と称した杉板がある。これは井戸内部より出土し、長さ80.6cm、幅14.5cmの板の上半分に文字と絵が墨書されている。絵は上に僧侶、下に人魚が描かれ、この両脇に文字がある。絵と文字の「そわ可」（梵語で成就の意味）から、この資料は人魚を供養するための札ではないかと想定している。同井戸縦板を年輪年代測定した結果、伐採年が1286年と確認された。	SE29～32：元豊通寶1／SE33：元豊通寶1／SE154：洪武通寶1／SE239：元豊通寶1／SE319：元豊通寶1／SE441：永楽通寶1／SE491：判読不能1／SE683：開元通寶1・皇宋通寶1・元豊通寶2・洪武通寶2／SK673：咸平元寶1・ 紹聖元寶1／SK686：至和通寶1・元豊通寶1／SD49：皇宋通寶1・元祐通寶1・紹聖元寶2・寛永通寶1／SD706：元豊通寶1・聖宋元寶3・紹聖元寶1／SKI191： 皇宋通寶1・熙寧元寶1／SX24：開元通寶1・元符通寶1・判読不能3／SX38：寛永通寶1／SKP2273：開元通寶1・景徳元寶1・祥符元寶1・天聖元寶1・皇宋通寶2・嘉祐通寶1・治平元寶1・熙寧元寶2・元豊通寶3・元祐通寶3・政和通寶1・淳熙元寶1・洪武通寶1・永楽通寶5・判読不能（無文銭か）1・判読不能2／遺構外：開元通寶2・淳化元寶1・至道元寶1・皇宋通寶1・元豊通寶1・□平通寶1・寛永通寶2／その他、10数点が塊状に存在	県教委『洲崎遺跡』2000
N114	越雄遺跡	井川町黒坪	平成12年	弥生時代・古代の集落跡。遺構外より銭貨3点出土。未報告（作成者実見）。	寛永通寶3	県教委『越雄遺跡』2003
N115	八郎潟湖底	南秋田郡大潟村	昭和45年	昭和45年4月13日、大潟村訓練農場A6圃場において、表土下約10～80cmのヘドロ層より、「カマスにはいっていたとみられる麻ヒモで通された古銭が約60kg単位で六ブロック」が発見された。各ブロックは、約20m間隔で一直線上に3ブロック、これと平行するように他3ブロックも約20m間隔で一直線上に並んで発見されたようである。出土銭を調査された上野昭夫氏は、同年6月と12月の2度にわたり『秋田魁新報』紙上に分析等の資料を寄稿されている。前者では、分析した点数は明示されていないが、銭種の出土比率を記している。これによると、至元通寶？3%、永楽通寶5%、寛永通寶文銭5%、寛永通寶足銭1%、寛永通寶元銭6%、寛永通寶無銘80%であり、全体の92%が寛永通寶であると報告している。また後者では、出土層位から次の3種に分類している。A：輸入銭混入寛永通寶：寛永通寶群、C：寛永通寶群であり、Bについては、輸入銭、鉄銭の混入はないそうである。その後（出土時期不明）同じA6圃場で「カマス入りのほかにカメにはいったと思われるものも発見」したという。これは鉄銭の混じる寛永通寶群のようである。また、A6圃場の西隣のA5圃場でも昭和44年9月に「永楽通寶を中心とする」銭貨が出土したとの記述もある。 これら出土銭は、その位置が伝潟航路上にあたることから、船の積み荷であった銭貨が何らかの事情で投棄したか沈没に伴う遺棄等の推定が可能である。	―	上野昭夫「八郎潟の沈船」『秋田魁新報』昭和45年6月9・10日付（夕刊）、上野昭夫「続・八郎潟の古銭」『秋田魁新報』昭和45年12月7・8日付（夕刊）。至元通寶ついては、調査者である上野氏が至元通寶＝宋銭と記しているが、同名の宋銭はなく、元朝1285年に初鋳の至元通寶であるのか、別の銭を指しているのかは不明である。なお、『中世の出土銭』によると至元通寶は国内での検出例はないとされる。
N116	藤山観音	秋田市楢山	宝暦年間(1751～63)	『黒甜瑣語』によると、「其頃（宝暦年間か）楢山藤山の観音祠の辺にても古銭をほり出し」とある。同様の記事は『月の出羽路』（仙北郡八）にも認められる。	―	人見蕉雨『人見蕉雨集』第二冊 1968
N117	雄物川辺	秋田市寺内か	明和初年（1764）	昭和22年に編纂された『寺内町誌』には、「明和の初年（1764）に河原御物川の辺で古銭を入れた甕を掘った。何れも世に稀な古代の寶で、甕の中に九ツの内といふ文字があった」とある。	―	寺内町誌編纂委員会『寺内町誌』1947。引用は1978年発行の復刻版参照
N118	高清水付近	秋田市寺内	明和8年（1771）	『寺内町誌』には、「明和八年（1771）九月十九日にも、高清水付近で甕に入れた古銭十六貫文余を掘出した。是は何銭であったか記していない」とある。明和年間の出土銭については、『伊頭園茶話』（三の巻）にも「明和中城北寺内村里人土瓶を掘出す。内に　　銭数百千あり。五朱半両数銭余は宋朝の銭也」と記され、壺のスケッチが載せられている。図の下には、「高さ二尺許素焼なり」とある。	―	寺内町誌編纂委員会『寺内町誌』1947。引用は1978年発行の復刻版参照
N119	寺内	秋田市寺内	寛政12年（1800）	『黒甜瑣語』によると、「さりし庚申閏四月念日、土崎湊の者とや寺内村にて十貫余の古銭を掘得たり。府に献ず。多くは明和のはじめ見し銭のごとく五銖半両尤も多し。かの九ツの寶●の中なるべし」とある。庚申は、寛政12年（1800）である。『寺内町誌』にも、同様の記載が見られ、「十貫余の古銭を掘った。いづれも五銖銭（秦一随）半両（秦－漢）が最も多かった」とある。	―	人見蕉雨『人見蕉雨集』第二冊 1968
N120	泉山	秋田市泉か	寛政年間（1790年代）	『黒甜瑣語』によると、「近き頃（1790年代か）城北中島の一士人、泉山の古舘にて秋霧の鷹の鳥屋待せし時も古銭を拾ひ得たる事あり」。泉山の古舘は、秋田市泉字三嶽根の熊野神社周辺を指すと思われ、『秋田県の中世城館』には、泉館として周知されている。	―	人見蕉雨『人見蕉雨集』第二冊 1968

No.	遺跡名	所在地	出土時期	内容		文献
N121	館神八幡	秋田市下新城字下向	文化8年（1811）以前	菅江真澄が文化8年(1811)に著した日記『軒の山吹』の図絵には「館神八幡祠・・・をりとして銭貨を城山に得る事のありき。みな大観通寶のみにして」と模写図入りの説明を加えている。館神八幡は、大正四年に諸社を合併して新城神社となり、現在秋田市下新城字下向に所在する。	大観通寶	内田武志・宮本常一編『菅江真澄全集』第4巻　1973、佐藤久治『秋田の神々と神社』1981
N122	堀内	秋田市金足字堀内	明治10～20年代	明治10～20年代、堀内にて「地下三尺位」のところから3,000点程の銭貨が出土した。銭貨は「お鉢形の容器へ、かぶせ蓋になってその中にあった」そうである。銭種の明らかなものは次のとおりである。また右記の他、皇宋通寶あるいは皇宋元寶、太平通寶あるいは太平興寶、乾重、天観という銭名も載せられている。	淳化元寶、至道元寶、咸平元寶、景徳元寶、祥符元寶(通寶)、天禧通寶、天聖元寶、明道元寶、景祐元寶、至和元寶(通寶)、治平元寶(通寶)、熙寧元寶、元豊通寶、元祐通寶、元符通寶、聖宋元寶、大観通寶、政和通寶、紹熙元寶、嘉泰通寶、嘉定通寶、紹定通寶、正隆元寶、洪武通寶、永楽通寶、宣徳通寶、朝鮮通寶	金足西尋常高等小学校『金足村郷土誌』第1輯　1934
N123	鵜ノ木・焼山	秋田市寺内	明治年間	『寺内町誌』古銭の項には、明治期の出土例にも言及している。「明治年間にも古銭入りの甕が屢々発見された。これは筆者も度々見たことがあるが、唐、宋の古銭で、他所によく見る洪武、永楽の如き元明時代のものではなかった。出土箇所は鵜ノ木と焼山とである。」	―	寺内町誌編纂委員会『寺内町誌』1947。引用は1978年発行の復刻版参照
N124	綾之小路	秋田市寺内字鵜ノ木	大正11年	『寺内町誌』には、「最近大正十一年旧二月九日の朝、現在寺内町綾之小路の長澤巳之吉氏の畑地より、土を採取している時鍬先に当った異常なものが古銭を入れた甕であった。甕は決して精巧なものではなく、指痕のはっきりしている古代美術を歴然と物語る稚拙なものであった。一部は古四王神社に大事に保管され、一部は・・・香爐と花挿に鋳直され」たそうである。寺内町綾之小路は、現在の寺内字鵜ノ木にあたる。	―	寺内町誌編纂委員会『寺内町誌』1947。引用は1978年発行の復刻版参照
N125	大悲寺・勝平山	秋田市寺内・新屋	昭和10年	『秋田銭貨史』によると、昭和10年「高清水大悲寺跡、勝平山から宋銭出土す」とある。大悲寺は、現在秋田市旭北寺町に位置するが、これは江戸時代初期に秋田藩主佐竹義宣が現在地に移したものであり、古記によると土崎湊三ケ寺の一として、弘安6年（1283）に寺内字焼山に創建されたと伝えられている。『大悲寺七百年史』によると「大悲寺跡から中国の宋銭が数十枚、出土した」と記されている。一方勝平山は、秋田市新屋に位置する標高49.4m程の小山を指すと思われるが詳細は不明である。	―	佐藤清一郎『秋田銭貨史』1972、笹尾哲雄『大悲寺七百年史』1976
N126	鵜ノ木	秋田市寺内字鵜ノ木	昭和22年以前	出土した時期は明示されていないが、『寺内町誌』には、「壺形土器であって、器の全面に斜行した細い縄目文が印せられてある。唐、宋の古銭が沢山這入ってあった。出土箇所は鵜ノ木で、国道の北側地表下三尺有余、摺鉢やうのものに覆われてあった。高一尺三寸、口径六寸五分、底径三寸七分、口に近く縊れた所周囲一尺八寸、口厚四分、胴の最も膨れた所周囲三尺二寸一分」と記されている。この壺は、その法量から現在秋田市教委に所蔵されている須恵器系陶器の壺を指すものと考えられる。陶器の製作年代は、珠洲編年に従うとⅡ期にあたり、13世紀前半～中頃と見られる。	―	寺内町誌編纂委員会『寺内町誌』1947。引用は1978年発行の復刻版参照 、栗沢光男・高橋忠彦・熊谷太郎「秋田県内の珠洲系陶器資料」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第1号　1986
N127	豊岩	秋田市豊岩豊巻字居使	昭和52年	昭和52年8月26日、豊岩豊巻字居使に所在する湯沢院の裏山で同寺の墓地拡張工事中、深さ約30cmの土中より1,486点の銭貨が出土した。容器は発見されていないが、銭貨穿内に縄が一部残存することから、緡の状態で埋納されていたことが窺える。銭名は次のとおりである。	開元通寶80、?元重寶5、唐國通寶1、宋通元寶7、太平通寶9、淳化元寶9、至道元寶19、咸平元寶20、景徳元寶26、祥符元寶29、祥符通寶18、天禧通寶30、天聖元寶66、明道元寶8、景祐元寶15、皇宋通寶150、至和元寶9、至和通寶5、嘉祐元寶9、嘉祐通寶19、治平元寶25、治平通寶3、熙寧元寶100、元豊通寶153、元祐通寶109、紹聖元寶42、元符通寶15 、聖宋元寶47、大観通寶13、政和通寶50、宣和通寶3、淳熙元寶3、慶元通寶5、嘉泰通寶2、嘉定通寶3、淳祐元寶2、皇宋元寶1、景定元寶1、正隆元寶1、洪武通寶79、永楽通寶201、宣徳通寶11、朝鮮通寶5、判読不能78	佐々木民秀「豊岩発掘銭を観て」『秋田銭貨ニュース』第18号　1977
N128	太平神社裏？	秋田市寺内か	昭和35年	『秋田銭貨史』によると、昭和35年「高清水丘太平神社裏手畑中より二貫八百目の宋銭出土す」とある。現在高清水地区には太平神社は存在せず、詳細は不明である。	―	佐藤清一郎『秋田銭貨史』1972

No.	遺跡名	所在地	出土時期	内容		文献
N129	下堤C遺跡	秋田市四ツ小屋小阿地字下堤	昭和62年	9～10世紀代の集落遺跡である。昭和62年に調査が行われ、該期の竪穴住居跡31軒、土坑、溝跡等が検出されている。銭貨は8号住居跡の確認面（埋土1層）から「紐で結ばれた状態で」72点出土した。「背文のあるものはない」そうである。	開元通寶4、天禧通寶1、皇宋通寶2、嘉祐通寶2、熙寧元寶4、元豊通寶3、元祐通寶1、元符通寶2、大観通寶3、政和通寶3、正隆元寶1、洪武通寶2、永楽通寶23、宣徳通寶2、判読不能19	秋田市教委「下堤C遺跡」『秋田市秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』1987
N130	勅使館跡	秋田市寺内字勅使館	昭和36年	秋田城跡の位置する高清水丘陵の南西端を占地する館跡である。秋田城跡及びその周辺区域は、昭和34年から4ケ年にわたり文化財保護委員会（現文化庁）による調査が行われており、勅使館地区も昭和36年第3次調査においてその対象となった。銭貨は館の周囲に巡らされている土塁盛土中より出土した。点数、銭名等の記載はない。	―	文化財保護委員会『秋田城跡第三次調査概要』1962
N131	後城遺跡	秋田市寺内字後城	昭和53年	秋田城跡の西約500mに位置する古代～中世の集落遺跡である。昭和53年に調査が行われ、3地区（及び昭和52年分布調査出土を含む）より銭貨162点が出土している。A区では土坑墓21基のうち6基より15点の銭貨が出土した。ST002では、骨片と共に銭貨2点出土している。ST006では、「底面についた状態で多量の礫が入って･･･覆土中には焼土、骨片が多量に認められる」。銭貨は右記の3点出土している。ST008では、焼土、炭化材、骨片が多量に認められ、銭貨2点が出土している。ST009は、「覆土には特に多量の礫を含み、焼土、炭化材が混入して」おり、骨片、歯も認められ、銭貨1点が出土している。ST013では多量の骨片と共に銭貨1点が出土している。ST015では、炭化物、骨片が多量に認められ、これらと共に銭貨6点が出土している。その他、SX042とした落ち込み内より、銭貨3点が出土している。またA区遺構外でも銭貨10点が出土した。B区では、SX043（東西約15m、南北約12.5m、深さ約5.5mの円形、擂鉢状を呈する遺構）より多量の木製品、陶磁器類、鉄製品、犬骨3頭分、馬頭骨等と共に25点の銭貨も出土している。同遺構は、溜池跡と想定されている。C区では遺構内外より計96点の銭貨が出土した。また昭和52年の分布調査では、13点の銭貨が得られている。	【A区】ST002：元祐通寶2／ST006：開元通寶1、皇宋通寶1、嘉祐通寶1／ST008：祥符通寶1、元祐通寶1／ST009：皇宋通寶1／ST013 元豊通寶1／ST015：熙寧元寶1、元祐通寶1、紹聖元寶1、元符通寶1、洪武通寶2／SX042：天聖元寶1、皇宋通寶1、元祐通寶1／遺構外：開元通寶2、元祐通寶2、政和通寶4、洪武通寶1、永楽通寶1 【B区】SX043：開元通寶2、咸平元寶1、天聖元寶1、皇宋通寶4、至和通寶1、治平通寶1、熙寧元寶1、元豊通寶3、元祐通寶1、紹聖元寶3、聖宋元寶1、洪武通寶4、永楽通寶1、宣徳通寶1 【C区】SE052：開元通寶2、永楽通寶1／SE054：開元通寶1／SE051：治平元寶1／SE054：熙寧元寶1／SE055：洪武通寶1／SK059 聖宋元寶1、至大通寶1／遺構外：開元通寶4、至道元寶1、祥符元寶5、祥符通寶1、天禧通寶1、天聖元寶5、皇宋通寶9、至和元寶1、治平通寶1、熙寧元寶7、元豊通寶8、元祐通寶3、紹聖元寶1、聖宋元寶3、大観通寶1、政和通寶1、淳熙元寶1、嘉定通寶1、洪武通寶8、永楽通寶7、朝鮮通寶2、寛永通寶2、判読不能15 【分布調査】開元通寶2、治平元寶1、熙寧元寶1、元祐通寶2、洪武通寶1、永楽通寶2、無文銭1、判読不能3	秋田市教委『後城遺跡発掘調査報告書』1979
N132	下タ野遺跡	秋田市川尻字下タ野	昭和52年	13世紀を中心とする集落遺跡であり、標高5m程の微高地に立地する。昭和52年に調査が行われ、井戸跡（SE8）より銭貨1点が出土した。「直径2.15cm、方孔一辺0.79cmを測り、比較的小ぶりな」銭貨である。	SE8：判読不能1	秋田市教委『秋田市下タ野遺跡』1979
N133	岩城館跡	秋田市下新城岩城字下向	平成元年以前	貞和年間（1345～49）新城氏の居館であったと伝えられる館跡である。ここでは銭貨1点が採集されている。	開元通寶1	秋田市教委「岩城館跡」『秋田県秋田市遺跡詳細分布調査報告書』1989
N134	秋田城跡第10次	秋田市寺内字鵜ノ木	昭和48年	高清水丘と称される独立丘陵上に立地する古代城柵遺跡である。古代以降も鵜ノ木地区を中心にこの地は利用されている。昭和48年の第10次調査において、10基の土坑墓が検出され、2基には頭蓋骨、骨片と共に銭貨が副葬されていた。2号墓坑では、6点が錆着して出土している。3号墓坑では4点出土している。これら墓坑を報告では、「副葬銭から中世末から近世にかけてのもの」と考えている。その他遺構外でも、10点が出土している。	2号墓坑：洪武通寶1、永楽通寶2、判読不能3／3号墓坑：大口通寶1、口寧元寶1、判読不能2／　遺構外：宋通元寶1、元祐通寶2、政和通寶1、洪武通寶2、寛永通寶2、判読不能2	秋田市教委『昭和48年度秋田城跡発掘調査概報』1974
N135	秋田城跡第21次	秋田市寺内字焼山	昭和52年	第21次調査において、SI306住居跡床面より、和同開珎が1点出土した。「きわめて遺存状態の良好な銭貨である。銅銭であり、計測値は径25.1m、厚さ1.45mm、内径6.3mm、重量1.7357g」である。共伴遺物は、土師器（甕）、須恵器（坏、蓋）、瓦、砥石、刀子などがある。	SI306：和同開珎1	秋田市教委『昭和52年度秋田城跡発掘調査概報』1978

No.	遺跡名	所在地	出土時期	内容		文献
N136	秋田城跡第26次	秋田市寺内字鵜ノ木	昭和54年	第26次調査において、SK445（長径1.1m、短径0.9m、深さ0.4mの楕円形の土坑SK445）埋土中より6点の銭貨が出土した。報告では「中世以降の墓坑と考えられる」としている。	天禧通寶1、元豊通寶2、洪武通寶1、銭名不明2	秋田市教委『昭和54年度秋田城跡発掘調査概報』1980
N137	秋田城跡第28次	秋田市寺内字大畑	昭和55年	第28次調査において、富壽神寶が1点出土した。出土位置は、明治元年前後に盛土された攪乱層内出土である。その他に遺構外より3点の銭が出土している。	富壽神寶1、天聖元寶1、元豊通寶、至和通寶1	秋田市教委『昭和55年度秋田城跡発掘調査概報』1981
N138	秋田城跡第35次	秋田市寺内字鵜ノ木	昭和57年	第35次調査では、11基の墓坑が検出され、うち6基より副葬と見られる銭貨が39点出土している。ST627（長軸1.62m、短軸0.6mの長楕円形）では埋土に、大量の炭化物に混じって骨片が検出され、角形の鉄釘6本と共に11点の銭貨が出土した。ST628（長軸1.45m、短軸0.45mの長楕円形）では坑内より3点の銭貨が出土した。ST629（長軸1.32m、短軸0.55mの長楕円形）では坑内より7点の銭貨が出土した。ST635（長軸1.55m、短軸0.36mの長楕円形）では埋土に炭化材・物が充填しており、無文銭が6点出土した。「うち3枚には布地の炭化したものと考えられる付着物が認められる」。銭貨は外径18mm、方孔を有する。ST653（長軸1.55m以上、短軸1mの長楕円形）では坑内より3点の銭貨が出土した。ST656（径約0.5mの円形）では坑内より9点の銭貨が出土した。また墓坑の他、SA652ピット群内より銭貨4点が出土している。墓坑については、「副葬銭として開元通寶から永楽通寶までが出土するが寛永通寶が出土しないことから、近世以前の遺構と考え」ている。	ST627：咸平元寶1、元豊通寶1、嘉定通寶1、洪武通寶2、永楽通寶1、判読不能5／ST628：熙寧元寶1、政和通寶1、無文銭1／ST629：祥符元寶2、祥符通寶1、熙寧元寶1、聖宋元寶1、淳祐元寶1、銭名不明1／ST635：無文銭6／ST653：洪武通寶1、銭名不明2／ST656：開元通寶2、天聖元寶2、熙寧元寶1、聖宋元寶3、銭名不明1／SA652ﾋﾟｯﾄ：咸平元寶1、皇宋通寶1、元豊通寶1、嘉定通寶1	秋田市教委『昭和57年度秋田城跡発掘調査概報』1983
N139	秋田城跡第42次	秋田市寺内字鵜ノ木	昭和60年	第42次調査において、墓坑内（ST810）より3点の銭貨が出土した。ST810は、長軸1.6m、短軸1mの楕円形を呈しており、5cm厚の炭化物の充填層が認められ、骨片も検出されている。	ST810：判読不能3	秋田市教委『昭和60年度秋田城跡発掘調査概報』1986
N140	秋田城跡第54次	秋田市寺内字鵜ノ木	平成2年	第54次調査においSI1051竪穴住居跡埋土より和銅開珎1点出土した。銭貨の「遺存状況はあまり良くない」。	SI1051：和同開珎1	秋田市教委『平成2年度秋田城跡発掘調査概報』1991
N141	秋田城跡第58次	秋田市寺内字鵜ノ木	平成4年	第58次調査において、SA1142布掘り溝底面より鉄銭1点が出土した。この溝跡は「鵜ノ木地区南部の堂風の建物（第30次調査検出）を中心に、一帯を東西約57～69mの範囲で区画する区画施設・材木塀（柱列塀）」であることが判明している。	SA1142：鉄銭1	秋田市教委『平成4年度秋田城跡発掘調査概報』1993
N142	秋田城跡第60次	秋田市寺内字大畑	平成5年	第60次調査において、須恵器短頸壺に入れられた萬年通寶5点が出土した。「古銭の表面には、腐食した布目が認められることから、底面に5点並べた上に布にくるんだ胞衣を納めたもの」と考えられ、いわゆる胞衣壺に銭貨を埋納した例である。壺は須恵器の蓋がきっちりと被せられており、径40cm程の小土坑（SX1305）に納められていた。土器の年代は8世紀後半と報告されている。なお壺内の胞衣（胎盤）の残存物を血液鑑定したところ、胎盤は男の胎児のものであり、血液型はB型であることが明らかとなっている。	SX1305：萬年通寶5	秋田市教委『平成5年度秋田城跡発掘調査概報』1994／小松正夫「秋田城跡出土胞衣壺の埋納銭「萬年通寶」について」『出土銭貨』創刊号　1994／小松正夫「秋田城跡出土胞衣壺の新知見と埋納銭「萬年通寶」について」『出土銭貨』第4号　1995／『秋田魁新報』平成7年12月7日付記事
N143	秋田城跡第62次	秋田市寺内字鵜ノ木	平成6年	第62次調査において、旧耕作土内、地表下約50cmの位置より和同開珎銀銭が1点単独で出土した。銭貨出土地点は、秋田城外郭東門から城外に延びる推定大路の南側にあたる。銀銭の組成は、銀97.7%、銅1.4%、鉛0.9%である。	和同開珎銀銭1	秋田市教委『平成6年度秋田城跡発掘調査概報』1995／西谷隆「秋田城跡出土の「和同開珎銀銭」について」『出土銭貨』第2号　1994
N144	秋田城跡第66次	秋田市寺内字焼山	平成8年	第66次調査において、表土層より銭貨が1点出土している。	？徳元寶（前蜀）1	秋田市教委『平成8年度秋田城跡発掘調査概報』1997
N145	秋田城跡第69次	秋田市寺内字鵜ノ木	平成9年	第69次調査において、井戸跡埋土1点、遺構外（表土層）1点の銭貨が出土した。銭貨の出土したSE1500井戸跡は、その構築面（第5層面）と共伴遺物（かわらけ大皿）から「12世紀後半から13世紀前半以降の年代」に位置づけられる。	SE1500：政和通寶1／遺構外：洪武通寶1	秋田市教委『平成9年度秋田城跡発掘調査概報』1998
N146	秋田城跡第72次	秋田市寺内字大畑	平成10年	第72次調査区では、表土～旧耕作土中より銭貨2点出土している。図示。	寛永通寶2	秋田市教委『平成十年度秋田城跡調査概報』1999
N147	秋田城跡第74次	秋田市寺内字大畑	平成10年	第74次調査区では、旧耕作土下の黒褐色土層（3層）より銭貨1点出土している。図示。	開元通寶1	秋田市教委『平成十年度秋田城跡調査概報』1999
N148	秋田城跡第75次	秋田市寺内字大畑	平成11年	第75次調査区では、表土～旧耕作土から銭貨3点出土した。図示。	寛永通寶3	秋田市教委『平成11年度秋田城跡調査概報』2000
N149	秋田城跡第76次	秋田市寺内字大畑	平成12年	第76調査区では、表土～旧耕作土から銭貨1点出土した。図示。	熙寧元寶1	秋田市教委『平成12年度秋田城跡調査概報』2001
N150	秋田城跡第78次	秋田市寺内字大畑	平成13年	第77調査区では、表土～旧耕作土から銭貨1点出土した。図示。	寛永通寶1	秋田市教委『平成13年度秋田城跡調査概報』2002
N151	秋田城跡第78次	秋田市寺内字大畑	平成13年	第78調査区では、旧耕作土から銭貨が1点出土した。図示。	寛永通寶1	秋田市教委『平成13年度秋田城跡調査概報』2002

No.	遺跡名	所在地	出土時期	内容		文献
N152	秋田城跡第80次	秋田市寺内字大畑	平成14年	第80調査区では、表土～旧耕作土から銭貨が2点出土した。図示。	天聖元寶1、寛永通寶1	秋田市教委『平成14年度秋田城跡調査概報』2003
N153	秋田城跡第82次	秋田市寺内字大畑	平成15年	第82次調査区では、表土層～旧表土層にかけて3点の寛永通寶が出土し、図が載せられている。	寛永通寶3	秋田市教委『秋田城跡調査事務所年報2003』2004
N154	秋田城跡第85次	秋田市寺内字焼山	平成17年	第85次調査区では、表土層下の造成土～旧耕作土内から4点の寛永通寶が出土し、図示されている。	寛永通寶4(うち1点は秋田川尻銭)	秋田市教委『秋田城跡調査事務所年報2005』2006
N155	秋田城跡第86次	秋田市寺内字焼山	平成17年	第86次調査区では、表土層下の造成土中より銭貨2点出土し、図示されている。	天禧通寶1、寛永通寶1	秋田市教委『秋田城跡調査事務所年報2005』2006
N156	秋田城跡第88次	秋田市寺内字大畑	平成18年	第88次調査区では、表土～旧耕作土中より銭貨6点が出土し、図示されている。	熙寧元寶1、洪武通寶1、寛永通寶4	秋田市教委『秋田城跡調査事務所年報2006』2007
N157	秋田城跡第89次	秋田市寺内字焼山	平成18年	第89次調査では、旧耕作土層より銭貨1点出土している。図示。	寛永通寶1	秋田市教委『秋田城跡調査事務所年報2006』2007
N158	待入Ⅲ遺跡	秋田市金足片田字待入	平成3年	主に中世の城館、墓地として周知される遺跡である。平成3年発掘調査が実施され、2地区(Ⅲ・Ⅰ区)から銭貨が出土した。Ⅲ区では東向き斜面の中腹部に立地する火葬墓群より銭貨が出土している。検出された19基のうち、3基の墓跡から計4点の銭貨が発見された。第6号火葬墓(長径78cm、短径48cmの楕円形)は、「埋土中には骨片が混在しており、底面よりやや浮いた状態で」銭貨2点が重なって出土した。第8号火葬墓(長径63cm、短径54cmの楕円形)は、「東寄りの底面よりやや浮いた状態で銅銭(文字不明)が出土した。骨片は量が多く、底面西側にまとまっていた」。第11号火葬墓(径20Cmの円形)は、「底面で銅銭(文字不明)が出土した」。またⅠ区は、丘の頂部遺構外より銭貨13点が出土している。うち12点は寛永通寶である。この地点はかつて金比羅神社が座しており、この神社に由来する銭と見ることができる。	Ⅲ区6号墓:政和通寶1・判読不能1、8号墓:判読不能1、11号墓:判読不能1／遺構外:寛永通寶12・判読不能1	県教委「待入Ⅲ遺跡」『秋田外環状道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』1992
N159	湯ノ沢F遺跡	秋田市四ツ小屋末戸松本字湯ノ沢	昭和58・59年	9世紀後葉に造られた土坑墓群が発見された遺跡である。昭和58年から2次にわたる調査が行われ、東西63m、南北36mの楕円形の範囲より40基の土坑墓が検出されている。銭貨は16号土坑墓より隆平永寶が1点出土した。同墓は長さ3.64m、幅1.06mの隅丸長方形を呈し、銭貨の他に土師器坏、砥石、鉄刀、鉄鏃、鎌、鋤先、銅製帯金具など多種多様な遺物が副葬されていた。	16号土坑墓:隆平永寶1	秋田市教委「湯ノ沢F遺跡」『秋田市秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』1984
N160	潟向Ⅰ遺跡	秋田市金足小泉字潟向	昭和45年	昭和45年4月19日、金足小泉に所在する男潟の西潟岸砂丘台地から和同開珎3点が重なった状態で発見された。銭貨は地表下約30Cmのところから須恵器片と共に出土したそうである。同遺跡では、昭和48年と58年に平安時代の火葬墓が7基発見・検出されている。いずれも土師器甕あるいは壺を骨蔵器としており、土師器坏を蓋としている例が多い。出土銭との関係は不明である。	和同開珎3	秋田県立博物館『所蔵資料目録(考古)』1983
N161	豊嶋村	秋田市河辺豊嶋(旧河辺町)	寛政初年頃(1789頃)	『黒甜瑣語』によると、「寛政のはじめ(1789年頃)に至りては豊嶋村にても一つの銭瓶をほり出せしに、元亀二年(1571)溝口氏久蔵之と小の木片に●りしはいかなる人にや」とある。同様の記事は、『月の出羽路』(仙北郡八)にも載せられている。	―	人見蕉雨『人見蕉雨集』第二冊1968
N162	館ヶ沢館跡	秋田市河辺三内字館ケ沢(旧河辺町)	昭和9年	昭和9年6月頃、三内字館ケ沢地内で畑地開墾中に銭貨が出土した。出土点数、外容器の有無は不明であるが、銭貨は紐で通して結ばれていたようであり、現在20点が発見者宅に保管されている。『河辺町の遺跡』には、右記等の銭名が記されている。館ケ沢は、岩見川(雄物川の支流)右岸に立地する小規模な館跡として周知されている。	咸平元寶、天禧通寶、至和元寶(通寶)、元豊通寶、元祐通寶、洪武通寶	河辺町教委『河辺町の遺跡』1987
N163	白根館跡	秋田市雄和平沢字水沢(旧雄和町)	昭和44年頃	昭和44年春頃、水沢地内を整地中に地下約30cmより銭貨が出土したようである。詳細は不明であるが、『秋田県の中世城館』には、「館からは焼米、刃物、黄瀬戸片、美濃焼片、珠洲焼片、古銭等が出土している」との記載がある。	―	県教委『秋田県の中世城館』1981
N164	井戸尻台Ⅰ遺跡第1次	秋田市河辺戸島	平成9年	縄文時代の集落跡、弥生時代の墓域、近世期の塚2基が検出された。銭貨は遺構外より7点出土した。	寛永通寶6、鉄銭1	県教委『井戸尻台Ⅰ遺跡』2001
N165	松木台Ⅲ遺跡	秋田市河辺松渕	平成10年	縄文時代・古代の集落遺跡。明治～大正期の焼土遺構(墓)が検出され、徳利・杯・煙管と共に銭貨が出土した。	SN122(周辺出土を含む):寛永通寶39	県教委『松木台Ⅲ遺跡』2001
N166	久保田城跡(本丸御隅櫓跡)	秋田市千秋公園	昭和63年	近世秋田藩主・佐竹氏の居城である。銭貨が出土したのは、明治10年前後の御隅櫓解体時の瓦等を廃棄するために掘られた土坑(第1号土坑)内からの1点である。	1号土坑:寛永通寶1	秋田市教委『久保田城跡』1989

No.	遺跡名	所在地	出土時期	内容		文献
N167	藩校明徳館跡	秋田市中通1丁目	平成13年	近世秋田藩の藩校明徳館跡とされる区域の調査。建物跡や井戸跡、溝跡、土坑等が検出された。銭貨は59点が写真で示されている。遺構内出土は12点であり、判読できるものは寛永通寶であった。	天禧通寶1、治平通寶1、元豊通寶1、永楽通寶1、寛永通寶54、判読不能1	秋田市教委『藩校明徳館跡』2002
N168	東根小屋町遺跡	秋田市中通2丁目	平成14・15年	近世秋田藩の武家屋敷跡の調査。掘立柱建物跡や門跡、井戸跡、水場跡が検出された。銭貨は、SE122井戸跡から出土したと報告されるが、図・写真なく、詳細不明である。	―	県教委『東根小屋町遺跡』2005
N169	虚空蔵大台滝遺跡	秋田市河辺豊成	平成16年	11世紀後半代の大規模な城館跡。柵列・切岸・空堀が検出され、これらは一見すると中世後期の山城を思わせる。15世紀代には墓地として再利用された。銭貨は頂部平坦面部から1点、斜面部から9点、尾根部から2点出土した。	平坦面部:寛永通寶1(遺構外)／斜面部:開元通寶1、太平通寶1、景徳元寶1、元祐通寶1、紹聖元寶1、政和通寶2、判読不能2(SKI895、SK1005・1045・1118)／尾根部:永楽通寶1(SK1626)、寛永通寶1(遺構外)	県教委『虚空蔵大台滝遺跡』2007
N170	古川堀反町遺跡	秋田市千秋明徳町	平成17年	近世秋田藩の武家屋敷跡の調査。掘立柱建物跡や井戸跡、水場跡を検出。銭貨は、土坑や溝跡などから45点出土。図・観察表あり。観察表で疑問符がつけられているものは、高橋が図から釈読した(2008.5.1)	開元通寶1、太平通寶1、天聖元寶1、明道元寶1、皇宋通寶1、元祐通寶2、洪武通寶1、永楽通寶1、寛永通寶36(うち1点は秋田川尻銭)	県教委『古川堀反町遺跡』2008
N171	湊城跡	秋田市土崎港中央	平成17年	17～19世紀の近世土崎湊の町屋敷に伴う遺構・遺物が確認された。銭貨は130点出土し、36点が図示されている。	熈寧元寶1、雁首銭3、寛永通寶103、判読不能23、寛永通寶のうちの9点は秋田川尻銭である。	秋田市教委『湊城跡(平成17年度調査区)』2007
N172	湊城跡	秋田市土崎港中央	平成18年	平成18年度の調査区からは、遺構外より銭貨が3点出土した。	寛永通寶3	秋田市教委『湊城跡(平成18年度調査区)』2008